
Missing Link

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i s s i n g L i n k

【Nコード】

N 1 0 1 3 F

【作者名】

冴川明希

【あらすじ】

自分の本当の名前、呼ばれてますか。誰も僕の『名前』を呼んでいない。ずっと僕を呼んでいたのは月だった。

序章

Missing Link

失われた環。

ある系列の中で欠けている要素のこと。

僕は知っている。

誰ひとりとして僕を、僕の本当の名を呼んではない。

頭の奥で反響する何か。

誰かの、声。

幾度も幾度も。

もうずっと、その何かに僕は呼ばれ続けている。

それは僕の名前じゃない。

それは僕のことじゃない。

ああなのに、その鈍く響く鈴の音が僕を呼んでいるだと本能的に知っている。

僕は、誰だ。

僕は、何だ。

そこで僕を呼んでいるのは

かきつこだま

葛冴珠は八歳の春のある日の出来事を今でも鮮明に覚えている。褪せることの無いそれは、繰り返される記憶の再生の賜物だ。

その日。校庭の桜が数輪漸く綻び始め、淡い花びらを僅かにその枝に纏っていた。

「かずら…葛……」

この春から新たに赴任して来た若い教師が、困ったように名簿と番号を照らし合わせ、席に座る少年を見ている。彼は不思議そうな面持ちで、自分が呼ばれるのを待っていた。

「ごめんなさい。葛の次、何て読むのかな？」

教師の顔を見ていた少年は一瞬の空白の後「こだまです」と応えた。

彼女は口の中でちいさくその名を繰り返し名簿にルビをふる。

そして爽やかな笑顔でこう言った。

「綺麗な名前ね」

咲いたばかりの桜の花弁がひとひら、春風に浚われ空へと舞った。

彼にとってこの一連の記憶は、あまり心地の良いものではない。連綿と続く平和な日常に違和感が混じりだした瞬間は、まさにその時だったと彼は思っている。違和感自身の名前が齎す許容できぬ苛立ちとでも言えはいいのか。

冴珠は己の名に妙なコンプレックスを抱いている。

これが一体何に困しているのか説明できないのだが、これだけは冴珠の中で確かな事だった。

何かが違う。

これは自分の名では無い。

冴珠という名は、等しくこの存在をカバーできていない。名前が指

す領域と自分とが、ずれているように感じてならないのだ。当たり前前に彼を「こだま」と呼ぶ者がいる。けれど、彼にはどうしてもその名が自分自身を指すものだと考えられなかった。

これ以前の記憶で、名前に関するものは何も持っていない。特に大したひっかかりも無く、己を指す言葉が「かずらこだま」であることに何の疑問も持たずに、彼はあの瞬間まで生きてきたのだ。

だからその違和感は『気のせい』だ、と彼は思った。

たまたまだろう、と。たとえば、教師の声が初めて聞く人のものであったからだ、とか。家族や親しい人間が呼ぶ、聞き慣れた声とは違ったからだ、とか。

少年はそう結論付け、日常に戻った。

だが時間が経てば経つほど、この違和感は奇妙に心の奥底に降り積もり、静かに層を成して消えぬままだと知った。一度自覚された違和感は、彼を麻痺させることをしなかったのだ。

やがて彼は初対面の人と会話するのに苦痛を覚え始めた。徐々に広がる滲みの様に、不明瞭な不快感が冴珠を蝕む。

あの春の日から数年後、ついに彼は自覚した。冴珠の名前を、彼自身の望むように呼べていないのは、何も初対面の人間に限った事ではない。父も母も姉も、身近な友人達だって誰一人として、彼の名を呼んではいない。

『こだま』

そう、自分に向けて声を掛けて来るのに。それは間違いなく呼び掛ける人々にとっては冴珠自身を指す音なのに。

（それは、誰だ）

一体彼らは、自分の『どこ』までを捉えて呼んでいるのだろう。その『こだま』という音は自分を一体『どこ』まで区切るというのだろう。

呼び掛けられる冴珠自身だけが、違和感を抱いている。その事に気付いて、ますます彼は自分の名前にコンプレックスを抱いた。

そして彼は 相手が名を呼ぶ度に失望するようになった。

（この人も違う）

しつくり来ない。

彼らは本当に自分の名を呼んでいるのか。

この名は本当に自分の名前なんだろうか。

俺の名は 何というのだろう。

あまりにも馬鹿馬鹿しいと、彼自身何度思ったか知れない。名前は
生まれた時に親から付けられたものだ。本当も嘘もあるか。

けれど幾度打ち消したとしても、心は正直だった。

違うものは違う。

何が違うのかは、わからない。

ただ、何かが違う。それだけが確かな事。

燻る違和感を飼い殺したまま、年月だけが過ぎていった。

些かささくれ立った心で、雨戸を開けたばかりの窓の外を眺めた。水分の多い霞んだ空。晴れているのに異物を含んだ気配。朝だというのにどこか濁った風は空の色を隠してしまう。

春は嫌いだ。

最近特にそう思う。

冴珠にはその原因が何なのか、呆れるほどはつきりわかっていた。大気の汚れの所為だけじゃない。

どこ中学から来た誰それです。

君はどこから来た誰なんだい？

彼が高校に入学してそろそろ一週間が経とうとしているが、毎日毎日同じ質問ばかりだ。その質問がそんなに大切な事なのか。北だろぅが南だろぅが隣の校区だろぅが、もっと言えば海外だろぅが構いやしない。冴珠はそう思う。

同じ試験を受けて、点数でラインが引かれて、そのラインの上に名前が載っていたという事だけじゃないか。

くだらない。冴珠はそう毒吐きたい気分だった。

階下から急かす母親の声が聞こえて、冴珠は頭を振った。そうこうする間も時計は止まらずに、秒針を巡らせ続けている。

（行きたくないんだよ）

新たな生活の始まり。

希望に満ちた人も、不安を抱えて進む人もいるだろう。新しい環境はそれなりに未知の世界の筈だ。そしてそれは裏を返すまでもなく、初対面の人間が大勢いるということだった。ここ数日の会話の大半は自己紹介だったんじゃないかと思う。クラスの人間、特に自分の周囲に座る人々と名前を交換しておく必要はある。連絡事項もあるだろうし、名前は必要なのだ。

だがそれ以外の人間と交わした紹介の一体何割が、必要の無いもの

だったのかと、冴珠は思わずにはいられない。多分廊下で擦れ違つて会釈する位の関係になれば上等だ。名前を知る必要も明かす必要も無く、きつと卒業までもう二度と会話の発生しない関係の人だつて相当数いるんじゃないか。

（いつそのこと、名札でも付けてやろうか）

横に大きく平仮名で読み仮名も付ければ随分楽になるだろう。その名札を翳して笑顔で言つてやる。

どうぞ宜しく

それくらいの社交辞令なら苦にならない。

それだけで十分じゃないのか。

もう一度頭を振つて目をあげる。どうにも気分が乗らない様で、思考がネガティブになっている自覚はあつた。机の上には開きっぱなしの英語一式。昨夜片づけた予習だ。階下では少し冷めた朝食が冴珠を待っている。

こうしてまた強制的に一日が始まるのだ。

「おい、起きてるか？冴珠つてば」

「俺は目を開けたまま寝る趣味は無いけど」

見てわかんないのか、と声を掛けてきた男を振り返りもせず冴珠は言った。声を掛けられるより以前に、この男が教室に入つて来たのはわかつていた。何かと顔の広い友人だったから、彼が教室を覗くだけで何人かの『知り合い』と挨拶を交わしているのを、どこか遠くの出来事のように感じながら聞いていたのだ。

「何やってんだ？」

来訪者は適当に冴珠の傍の机に鞆を置いて、自分のために椅子を引く。放課後の教室は賑やかで、少し荒っぽいその音も大して人の気に留まらないようだった。

「別に……」

特に何を見ていた、というのではない。教室の窓、そのガラス越しに外の景色をぼうつと眺めていただけだ。冴珠の席は南面の後方というかなり良いポジションだったから、ちょっと椅子の角度を変えただけで四階からの眺めが手に入った。

「ああ、桜か？ やつと咲いたなあ」

「…桜？」

冴珠は、言われて気付く。五分咲きの桜。校庭には幾つかの白いものが渦を描いていた。どこかに視点を定める気も無かったから、本当に窓の外の光景を見ていただけだった。見えたものが『何』なのかも意識していなかったらしい。

「一年生は四階に教室があります、なんて言われてがつくり来たけど、悪くねえよな。マンションとかに住んでねえ限り、家からはこんな高さで見ることねえし」

どこか嬉しそうな声音に、冴珠は漸く少年を振り返った。視線の先では幼馴染の友人が、机の上に置いた鞆の上に我が物顔で寝そべって外を見ていた。きっと、彼はその台にしている机が誰の物かも知らないだろうに。

「どうした？」

「いや」

何か用か、と冴珠は素っ気なく続ける。

「なんか冷たい…」

「用が無いなら帰る。お前も用が無いなら帰れ」

「お前ね、それ仮にも小、中と一緒に勉学に励んできた人間に言うセリフかあ？」

「頼んだ覚えはないけど」

「ひでえ！」

「うるさいな」

彼らはいつもこんな調子だ。この少年の名前は坂本一真という。どちらかといえば正反対のイメージを持たれることが多いが、冴珠にとって気の合う数少ない友人のひとりだった。冴珠にとってはだからこそ、の言動だとも言える。八つ当たり。

冴珠は自身の言動をそう解し、ちょっと冷たくありませんかと文句を垂れる友人に、年不相応だとはとても言えないと気付いた。
「確かに、な」

呟いて、子供っぽい八つ当たりをどう誤魔化そうかと思案しかけた冴珠は、別の事に気を取られてしまった。

「…カズ、お前また背が伸びてない？」

春休みには合っていた筈の位置で目線が合わない気がする。

「俺って成長期だもーん」

「……頭悪そうだぞ、お前がやると」

心底嫌そうな表情の冴珠に、一真はニヤリと笑った。

「そんなこった気にしません。冴珠がトロいんだろ」

「俺は普通だ。170はある」

対する一真はそろそろ180cmに手が届きそうなのではなからうか。ほんの一週間で身長が目に見えて変わるのが不思議だ。

「やー、伸びる時期は人それぞれさ」

「それをお前に言われると腹が立つ。今に見てるよ」

「これはもう遺伝子レベルでしょ。オレんち皆でかいし」

「お前の家族が皆でかいのは知ってるけどな、そういう問題じゃないんだ」

へーだとかほーだとか妙な笑い声を漏らしていた一真は、ふと顔を改めた。

「ところでさ、なあ、放課後空いてるか？」

漸く本題か、と冴珠は友人がここへ来た訳を察する。

「……どっかに美人がいるって？」

「なんで知ってんの」

「お前、美人と聞けばどこへでも、だろ」

失礼な、と憤慨するのかと思いきや、一真はうんうんと肯いた。

「駅前のカフェ・ブランシュのウェイトレスなんだよ〜！」

「カフェ・ブランシュ？ ああ…姉ちゃんも時々学校帰りに寄ったって言ってたっけ。あそこのシュークリームは確かに美味かったけど。っか、ひとりで行って来いよ」

「怪しいだろうが。オレがひとりでシュークリーム食ってたら」

冴珠は180近くある学生服の男がシュークリームを頬張りつつ、目当てのウェイトレスをちらちらと盗み見している姿を想像し、口を掌で覆った。

「自意識過剰…じゃないな。大真面目な顔で言うって事は、怪しいって自覚はある訳だ。ひとりで行く勇気が無いんだな。要するに…」

「あ、お前勘違いしてるな！オレみたいなステキな男の子がひとりでシュークリームを…」

「前言撤回。自意識超過剰だ。何だその『ステキな男の子』って。鳥肌立つぞ！」

「…まあ…怪しまれるかもしれないってのは微かに、ほんの微かに、だぞ？ 思っけどな、大外れだ。タテマエなんだよ。これはな、ほっときゃカサカサに干からびちまうお前のことを想って誘ってるんだよ」

そりゃどーも、と冴珠が呟いて首を回すと右も左もコキコキと鳴った。

「この間…入学式の後、母さんとブランシュに入ったらさ。いたんだよ。大学生かな。高校生かもしれないけど…この近辺だとバイト許可してる高校ってどこだっけ」

「知らん。この学校は原則禁止だと知ってれば十分だ。っか、お前、川名先輩はどうしたんだ。春休みにメアド交換して貰えたって言ってなかったっけ？」

「聞いてくれるな。オレは新しい恋を探すんだ。そのための第一歩

だ。毎日課題漬けじゃ、いくらピチピチの高校生だって枯れちゃう。生活にはもつと潤いが必要だと思わね？」

「お前がピチピチ言うな」

胡乱な眼差しを向けつつ、冴珠だって入学式も済ましていない春休みの内から大量に出された課題にうんざりしたのは事実だった。幾ら姉から「半端じゃない課題が最初から出るから覚悟しとけ」と脅されある程度予測していたとは言え、そろそろ息抜きが欲しい。

「いいよ、行こう。お前が不審者にならないよう協力してやる代わりに、コーヒー奢れ」

冴珠の提案にう、つと詰まった一真は、それでもめげなかった。

「一杯だけだ。お代わり自由のミスドじゃねえんだから」

三杯、四杯と飲まれてもしたら高校生の財布の中身は消えてしまいかねない。

「商談成立。じゃあノート出して来るから」

机の上に無造作に置かれていたルースリーフを一枚手にとって、冴珠は立ち上がる。多分返却された数学の小テストの解き直だった。ホッとした顔で一真は手を振る。

冴珠はかなりのコーヒー大好き人間だ。以前一真が嗜好品としての価値を無視した飲み方だと指摘したが、その時はさらっと無視された。ちなみに一真の知る最高記録は一日に12杯だが、冴珠はあまり自分を語るということをしないので、実際の最高記録はどうなのか定かではない。

一真が思つに冴珠の場合、コーヒー好きを通り越してカフェイン中毒だ。

「あいつ、よく胃に穴空かないよな」

余計なお世話だと眉一つ動かさずに呟く姿が目の前に浮かんだ。

一真は冴珠を『かわったヤツ』だと思っている。

小学生の頃から冴珠の事を知っているが、初めて思ったのはいつだったか。

昔から冴珠は一真の周りの人間に比べ、妙に落ち着いた雰囲気を持っていた。浮世離れしているというのだろうか。人生を達観する、とまで言ってしまうのは大袈裟にしても、いつもどこか周りの人間とは離れたポジションにいた。

友人たちと騒いでそれなりに楽しんではあるが、ハメを外した所など見たことが無い。

輪に入っているのに、馴染み切らない。

かといって社交性が無い訳ではないから、疎外される事もなかった。じゃあ控えめで、平凡な子供だったのかというと、きっと誰もが首を振るだろう。

けして目立たなかった訳ではなく、むしろ独特の雰囲気は人目に止まるものだった。

『何だか良くわからないけど、こいつはちょっと違うから一目置いてるんだ』

今思えば、周囲の人間　主に男子は、冴珠に対してそんな扱い方をしていた気がする。

その様子を見ていた小学生時代の女子達は「こだま君って大人っぽいよね」と評していた。

奇妙なズレ。

ずれているのは確かだが、何がずれているのか、その原因が何なのかも良く判らない。

その良くわからない『何か』が何故か心地良く、一真はいつの間にか冴珠とつるむようになった。

「かわったヤツだよなあ」

「誰が？」

窓にうつすらと映る少年が不機嫌そうに顔を顰めている。一真は苦笑いしながらガラスを指差した。実を言うと一真は声を掛けられるまで涙珠の事に気付かなかった。時々 彼は気配が無い。

「失礼なヤツ。俺から見ればお前の方が変わってるね」

「オレはまともだろ？」

「美人だからって、イチイチ見に行くのが？まとも？」

「お前みたいなのは不健康だ。アツサリし過ぎ」

「失礼な。理想が高いというんだよ。お前みたいにがつつけるような煩惱に恵まれて無いもんでね」

「そこまでいうか？フツ……。黙ってりゃいいのに口を開くと飛び出す毒舌、なんとかしろよ」

「お前に言われる筋合いはないよ。それより行くの？行かないのか？はつきりしろよ」

「行くに決まってるだろ！お前を待つててやったんだぞ」

日常的に繰り返される会話でじゃれ合って、昇降口に通ずる階段を降りる。重いガラスの扉を押し開けた瞬間。

音を立てて体に叩き付けられた、かすかな冷気を孕む突風。

旋風は校庭の砂を巻き込み、舞い上がらせる。

「春の嵐だな……」

砂塵から反射的に目を庇いつつ涙珠の声に頷いた一真は、砂に霞んだ校庭を透かし見ながら、昔母に手を引かれて通った桜並木の下を思い出していた。

「春は祈りの季節なのよ」

母は特別な事のように、空を見上げながら教えてくれた。一真も倣って見上げれば、空は黄色い濁りで彩られていた。

「あれは何？」

指差した先の空を見て母は笑う。あれは黄砂よ。春の印、と言った。「コウサって何？あんまり美味しくなさそうだよ。にごってる」

「黄砂はね、遠い中国っていう国の方から、海の上を越えて運ばれ

てくる砂漠の砂よ。黄色い砂なの」

「ここまでずっと？空の色も変えちゃうなんて、すごいね」

「風が運んで来るの。カズくんは 真っ青な空の方が好き？」

「うん。キレイだもん」

「そっか。でもね、それでもこの黄色い砂と風が…春が来た証拠なのよ」

春。

その時は春がどういいう季節なのか実感していなかったけれど、今なら一真にもわかる。

人々にとって春は、再生の願いが込められた季節だ。幾千年と繰り返される営みの中、春は生きとし生けるものにとっての期待だ。生命の息吹がこの世を満たす季節だ。冬の寒さや厳しさを一気に持ち去ってゆく風。人々はその強さの中に、春の到来を感じ取るのだ。あの凍えた、辛い冬は終わったのだ、と。

「春が来た…んだなあ」

ガラにもなく感傷的な気分になったのは、今の一真にも、その『再生の願い』や『新たな出会い』への期待があるからに他ならない。高校生活が始まって一週間。青臭い期待を抱いていないなんて、それこそ寂し過ぎるだろ、と思う。

校庭に背を向けて目を庇っていた一真は、吹き抜ける風の勢いが少し衰えたのを見計らって、先に地面に降り立った牙珠を振り返った。
「なあ…」

一真は呼び掛けようとした息を飲み込んでいた。

嵐だと呟いた牙珠は、砂塵の舞う中、目を細めるようにして空を仰いでいる。

何かに遮られた様に、一真の唇が言葉を拒む。

玄関口から数歩、校庭へと足を踏み入れたまま、牙珠は空を見詰めて動かない。

煽られた砂が埃を伴い、斬るような速さで二人の間をすり抜けた。動くものはただ風ひとつ。

他は時が止ったように、そこに在った。

誰か
誰か
誰か

そうやって壁を叩き続ける人は

その壁が叩き壊された後の世界に何かしらの希望を持っている

ある時 多分小学校の四年生位の頃のことだ。 冴珠こたまは母親に何故こんな名前にしたの、と訊ねたことがあった。 母はいい名前でしょう、と自慢げに応えた。

冴珠。

確かに綺麗だとは思う。 字面だけ見れば、冴えた宝石。

彼女は綺麗な心を持った人、という意味を込めたのだと言った。

あの時、自分はどうか訊ねたのだろうか。

「どうして僕の名前は『冴珠』なの？」

だったろうか。

(いや…違う)

「どうして僕は『冴珠』になったの？」

確か、そう訊いた。 夕飯時、丁度ニュースで新生児の名前の話が出たのだ。 この機会を逃してなるものかと、口の中がカラカラになるほどの覚悟をして、訊ねたのを覚えている。

覚悟は、結果から言えばし損だった。

冴と珠という字を、男の名前に当てるには少し迷ったんだがなあ、
と言ったのは父。それもそうかもしれない思った。どちらも同じク
ラスの女子の名前に使われていた。

「気になるか？ちよつと読みにくいしな」

「知らない人からサシユちゃん、って呼ばれたことはあるけど…ど
うだろう……」

（女の子みみたいな字が使つてあるから、気になる…のかな）

大根の漬物を咀嚼する度に、頭の奥でボリボリと音が響く。

何か、違う気がした。

（読み難いとかじゃなくて）

自分の質問の意図が正確に伝わっていない。

だが、どう訊けば伝わるのか、伝えられるのかが冴珠にはわからな
かった。

何故、自分は『冴珠』と呼ばれるようになったのか。

そうとしか、訊き様が無かったのだ。それに対して『綺麗な心を持
った人になって欲しかったから』と言われれば、そこまでだった。

（そういう事を訊きたいんじゃない……）

上手く疑問を伝えられないまま、結局冴珠はそこで引き下がった。

今なら、もう少しマシな訊き方が出来るだろうか。

女の子の様な字を使つてあると言われたつて、それは別に構わない。
今時の子供の名前なんて、どっちがどつちなのか判らない、一見し
ても男女の区別の付かない名前なんて山ほどある。万葉仮名ならぬ
平成仮名だ。友人の「坂本一真」の様に、すんなりと「サカモトカ
ズマ」なんて読める方が珍しい気がするくらいだ。クラスに三十人
いたら、半分以上は当て字なんて事はザラにあるのだから。
字の所為なんかじゃないよ。

訊きたいのは、名前に籠めた『願い』や『想い』の話じゃないんだ。

「さつき水、運んでくれたオネーサンも良かったけど、あの子じゃないんだよな」

「……今日入ってるのか？」

「確信犯的に会うのも良いけど、会えるかどうかのスリルを楽しむのも良くてね？」

「知らないって、言っても良いんだぞ。むしろ一度接客を受けただけの人間の勤務状態を把握してる方が恐いから」

店内はそこそこ客が入っていたが、ちらほらと空席のテーブルもある。冴珠達のように学校帰りのグループも数組。『ファーストフード店より若干敷居は高目だが、何かあれば利用する店』と冴珠は姉から聞いたことがある。『何か』は大抵、試験が終わった後に仲の良い友人同士がお互いの健闘（もしくは惨敗）を労うという趣旨で要はテストの打ち上げだ。

二人の目の前には水と氷で満たされた二つのグラスが置かれている。水を持ってきてくれた店員に二人はそれぞれシュークリームとアメリカンを注文した。

冴珠は店員に気を取られてきよろきよろと挙動不審な友人を観察しながら、放置した。何とはなしに耳を澄ませばそれぞれが好き勝手に内輪の話に興じている。

暫くして、一真が捻っていた身体をテーブルと平行に戻し、がつくりと肩を落とした。

「カズ、それは何だと思う？」

「は？」

冴珠は一真の手元にある、半分ほどに減ったグラスを指差して訊ねた。

「それって、水だろ？」

「コップって言ったら間違いなのか？」

「間違いじゃねえだろ？」

一真は冷やされて汗をかいだグラスを取り、中身を更に飲み込んだ。氷も一緒に飲み込んで、ガリガリと音を立てて咀嚼する。

「氷水を入れた、ガラスのコップって言ったって誰も間違いとは言わねえよ」

「じゃあ、それはどうだ、と訊かれたら？」

「うまいとか、冷たいとか言うんじゃないの。感覚だったら人によって違うだろうけど」

ことり、とコップを白い机の上に戻して、一真は顔を顰めた。

「お前、何が言いたいんだよ」

「当たり前的事を確信したくなる時もあるんだ。事象や現象が先に在って、それに言葉が貼り付けられてるって事をさ」

「……またややこしい事を考えてんのか？あんな、そんなのは当たり前だろ？進化の過程を考えてみるよ。バクテリアでも何でも良いや、原始的な生物が言葉を持つか？持ってたねえだろ。そこから長い時間掛けて進化してきたんだから、言葉が出来たなんてのはずっとずっと後だろ」

「わかってるよ、そんなことは」

「俺の勝手な推測だと99,999…9%位は『モノ』や『コト』が先だ。残りの0,000…1%はそうだなあ…」

そこで一真は机の端に置かれているプラスチックボードに挟まれたメニューに目をやった。

「仮にさ『ポンピンプー』って言葉があったとするだろ？」

「……お前今、絶対パンプキンプリンの所を見たな。センス無いぞ」

「黙れよ。兎に角、『ポンピンプー』って言葉を作る。今、オレが作った」

「良いよ、わかったって」

「これは勝手に、しかも即興で作ったから誰が聞いたって、タダの音だ。雑音で良いんだよ。だけど、それを偶々口にした時、もし誰かに聞き咎められて、意味を訊かれたら」

「『雑音です』で良いじゃないか。何か変な音が口から出ちゃいま

した、で」

「そう言えなかったらどうすんだ。そんなふざけた雰囲気じゃない
場面で、何としても真面目に応えなきゃいけなかったら」

「……そんな緊迫した場面で『ポンピンプー』とか言うなよ……」

「煩いって！オレは多分必死に、その場でこの『ポンピンプー』に
相応しい意味を考えるだろう。……マジ、何にしよう？」

「今の流れだと『意味は無い』で良いじゃん。『ポンピンプー』は
『何の意味もありません』という事です、で」

一真はうーんと唸った後で、まあ良いだろと言った。

「こんな馬鹿な話は滅多に無い、例外中の例外だろ。言葉は後だ」

「言葉が後だったのは俺だってわかってる。予測や想像も出来ない、
認識できない事は言葉になんかなる筈がないんだ」

「言葉には出来ねえって事だろ？在るとは思ってないから」

「そう。不可能だ」

でもさ、と冴珠は机の上で水滴を浮かべるグラスを見詰める。

「何か不思議なんだよ。モノが在って、言葉が出来たっていうのな
ら、きっとそれぞれのモノに名前を付けていった大昔の人たちは

多分名前を付けるとか呼び方を決めるなんて意識は全然無かった
と思うけど その『言葉』が相応しいと思ってたって事だろ。自
分達の身近にあったり生活に必要なもの…生活道具とか、自然現象
なんかから、きっと言葉になっていった筈だ」

「なんだその、言葉が相応しいって」

「疑問を持たないって事だ。俺達は昼に空で輝く熱を持った光を「
太陽」とか「日」と呼ぶ事に反発も疑問も無いだろ。直接姿が見え
なくても、枝を揺らしたり体に感じたりした空気の流れを「風」と
呼んだんだろうけど、特におかしいとは思わなかったって事だ。

もっと、他の呼び方とか名前の方が良いんじゃないかって話には
ならなかった」

「なあってたら、今その言葉はねえだろうな」

冴珠は肯く。

「更に言えば、言語が違っても、同じ現象を指す言葉がある事にも何の疑問も持たない。日本語では太陽は日、お日様、お天道様なんて言葉で言い表される事もあるけど、英語ではsunだ。俺は他の言語は良く知らないけど…『太陽』を表す言葉が無い言語なんて、きつと無い」

「そりゃ太陽がこの世にあるんだから、それを表す言葉はどうしたって必要になつてくるって。太陽は特に大事なものだろ。無かったら生物は存在出来ないんだから」

「どれも正しい、って思うじゃないか」

「一真がああ？と眉を顰めた。

「冴珠くーん。日本語しゃべってくれ。良く解からん」

「違う言葉なのに、結局は同じものを指している。でもそれを誰も疑問に思わない。英語を話す人々の間では太陽をsunって言うんですよ、って言われたら素直に「そうか」って思うだろ」

「あのなあ…思わなかったらテストで点取れねえだろーが。もしもsunを勝手にコーヒーなんて訳しちまったら話が通じねえし。単語一つくらいならマグレで何とかなるにしろ」

「違うよ、日本人が他所の言葉を知った時に「おかしい、あれは『sun』じゃなくて『日』というべきだ」とは思わないって事だよ」

「…思わねえだろ？」

「思わないよ。だから 不思議なんじゃないか」

先ほどのウェイトレスが漸く銀色のトレイにコーヒーとシュークリームを載せて運んで来た。バナラの香りがふわりと漂う。二人は早速白く色付いた柔らかそうなそれに齧り付く。まぶされた粉砂糖の甘みが先ず伝わって、パリパリの皮とそれに包まれたとろりとしたカスタードクリームが口の中に広がる。美味い。

「この話の流れからいくと、「マズイ」もんを喰った後にしか「ウマイ」って言葉は生まれなかったって訳だ。ああ…食べる順序は逆でも良いけど」

言ってしまったから、一真は自分の台詞が先ほどの会話の流れの延長にあるものと気付いた。

「感覚は比較するしかないから、二つを較べて初めて不味いのか美味いのかの判断が出来たんだろうな」

牙珠こだまは自然について来てしまった。

「……その後に程度を表す言葉か。「ちょっと」「マズイとか、「かなり」「ウマイとか」

「きつとその後で気付くんだ。「もっと」「美味しいものがあるんじゃないか、とか。勿論その逆も。食べた事がなくても、程度の問題なら推測できる」

「経験が無くても予測ができるもの、か。言葉が先に在ってもおかしくないタイプだな」

ちよつと・かなり・もっと　これらの「程度」を表す言葉を持たなかった大昔の人はさぞかしモヤモヤしただろう。そのモヤモヤ感を払拭するために、それらの感覚を言い表す相応しい言葉を作ったのだとすれば、案外言葉が先に出来る事もあるのかもしれないと一真は思った。

「そうだ。そして　予測や想像も出来ない、認識できない事は言

葉になんかなる筈がない」

（そう来たか）

冴珠はその台詞を真顔でもう一度繰り返し、一真はそれに緩い笑みを浮かべてみせた。

「で、さつきからお前はその不可能な事の何に、そんなに引つかかっているの？」

こんなに美味しいシュークリームを頬張りながら、一体何の話をしているんだろう。ややこしい事を考えながら食べるより、味わって食べるのが礼儀だろ、と一真は思う。

だが、そう思いながらも冴珠に付き合ってしまうのは、シュークリームと話題を天秤にかけた結果、結局は一真自身話の続きが気になって仕方が無かったという事なのだが。

（不本意だ。シュークリームに失礼だ）

「お前は 自分の名前が「坂本一真」である事に疑問を持つか」
真面目な顔をして問いかける友人に一真が少し苛立ったのも事実だった。

「持たねーよ」

「何故？」

「……それは俺の台詞だつーの」

「基本的に先に『モノ』がなければ『言葉』も無いんだろ。少し拡大して、想像できる範囲なら『モノ』や『コト』を想定して言葉が出来てもおかしくない」

そうだよな？と冴珠はひとつひとつを確認するように机の端をトンと指先で叩く。

ちゃんと味わって食べてんのか、と問いただいたいのを堪え、そうだろうよと一真はいい加減に頷いた。

「想像出来ないものが言葉になる筈も無い。なら どうして、無限にある音と文字の組み合わせからお前の両親は「一真」って名前を選んだんだ？」

「そこ、話が飛んでねえ？」

「俺にとつては飛躍してない」

あー待て、と頭を振って一真はコーヒーに口を付けた。

「……お前が言いたい事って『ひとりひとりの真実を見極められるように』っていう名前の由来的な意味じゃねえよな？」

「違うね」

「オレっていう『モノ』が先に存在して、それに相應しい名前が付いてる筈だって言いたいの？もしかして」

「そう。同じような意味を表すなら、考えたら別の名前だって表現できるだろ？ぶっちゃけ別に『真一』^{シンイチ}でも良いじゃないか。それとも『一真』という漢字で「イツシン」やら「カズマサ」は駄目なのか？何故？お前は『カズマ』になっただろう」

「……さあ？」

「どうしてお前はそれを疑問に思わないんだろう」

「ちよつと待て。自分の名前が何か途轍もない偶然で決まったつてのは了解すつけどな、そこで疑問持ったつてどうしようも無いだろ？」

「どうして。もつと相應しい名前があつたかもしれないのにつて、お前は考えないんだな」

「ねえよ。芸名やH・N・じゃあるまいし。今の話の流れからいけば、人の名前は後者だろ。拡大バージョンの方。想定やら希望なんだよ。人の名前が先に在ったつて何も変わらんだろ」

ふうん…と冴珠は呟いて、一口残っていたシュークリームの欠片を口に放り込む。長い付き合いで、一真には冴珠がこれっぽっちも納得していないのが見て取れた。

（おまえ、ホントに味わつて喰つてんのか！）

会話にストップ掛けてやろうか、と思いながらも一真の口から出てきたのは、割と弱った声音だった。どうやら深刻そうな雰囲気なのに、冴珠の話の終着点がさっぱり見えない所為だ。

「あのさあ……相應しいつて、何なんだよ」

「だから言つただろ。その名前を呼ばれて、疑問を持つか持たない

か、だよ」

「呼ばれて疑問を持ったら、相応しくねえって訳？」

「そうだろ。太陽を太陽と呼んで疑問を持つのか？持たないだろ」
ちら、と確認するように冴珠は一真を見た。

「それとこれとは話が違うんじゃないの？太陽に心なんて無いし、
万が一そんな突拍子も無い事があつたとしても、その言葉を人間如
きが理解するのは不可能だ。『そんな名前で呼ぶな』なんて文句言
つてもわかんねえよ」

ああ、そうだなと言いながら、冴珠はシュークリームのプレートに
載せられた付け合せのバナアイスクリームを掬った。

「納得してない訳？自分の名前に。お前という『モノ』の存在に貼
られた『名前』に、疑問を持つてゐるって事？」

「……そういうことになるね」

明後日の方を見たままそう返した友人に、一真は大きく息を吐き出
した。

「そういうことってなあ……おばさん達にとっての、『我が子への願
い』を名前にしただけだろ」

「希望や願いを籠めたにしろ、何故その『音』や『文字』を選び出
したのか、だよ。お前も言ったじゃないか。『途轍もない偶然で決
まった』って。親は俺の何を見て、この名前にしたのが俺には

さっぱりわからない。」

「じゃあ、お前は何て呼ばれば納得するんだよ」

（不毛だ）

半ば投げ遣りな口調で一真は言った。目の前の冴珠はじっと、鈍く
光るスプーンの先を見詰めている。

「それがわからないから……確認してるんだよ」

『モノ』にはそれに相応しい名前が当てはめられている。

『モノ』や『コト』から想像されない言葉は生まれない。

（なら……）

自分という赤子を見て、名前を考えようとした時に、何かしらのイ

ンスピレーションが働かなければ、無限にある音や文字の組み合わせから『冴珠』という名を選ばなかったのではないのか。

それなのに、どうして名前を呼ばれる度に自分の名前でないような気がするのだろうか。

名前を呼ばれる度に、何かが足りないような気がするのだろうか。

冴珠は目の前でコーヒーを啜る男を見た。彼は 坂本一真は、自分の名前が「一真」であることに何の疑問も持っていないのだ。それは誰かに

「一真」

と呼ばれれば、自分という『モノ』全てを「呼ばれた」と感じるという事なのだろう。

（でも俺は）

「冴珠」と呼ばれても「どこ」まで呼ばれているのかわからない。

その名前は確かに冴珠の身体を振り向かせる力を持つてはいるが、心まで届いてはいない。心は 呼ばれる度に違和感を覚えている。

（俺は……なんでこんなに寂しいんだろう……）

誰か
誰か
誰か

叩き続けた壁がついに崩れたとしても

壁の外の世界は、その穴を覗き込む瞬間までただの想像に過ぎない

喫茶店を出て電車に乗り込み、最寄りの駅を出たところで寄る所があるからと断って、冴珠は一真と別れた。

冴珠は雑踏の中を歩く。五時半を過ぎ、駅の周辺では学生とサラリーマンの姿が入り混じりだしていた。

寄る所があるなんて嘘だ。

早く、ひとりになりたかった。

校庭に出て空を仰いだ途端湧き出した「足りない」という感覚。この季節になると特に感じる「名前」に対する違和感だけでなく、もっと重大なもの。自分を構成する核ともいべきものが無いという焦燥感。

それはいつの頃からか冴珠の心の隅で、こっそりと飼われている魔物だ。この魔物は普段微かな気配しかないのに、時折大きく成長して冴珠の精神を支配する。

お前には大事なものが足りないんだよ

薄黒い魔物はそう、冴珠を唆す。

俯いた冴珠の唇から自然に笑みが漏れた。何か足りないなんて、小さな子供が駄々を捏ねているようだ。「足りないもの」が在る所

為で苛立っているのか。それとも「足りない」と思ってしまうから、現状に満たされずに苛立つのか。前者であれば本当に何か「足りないもの」があるし、後者であれば「足りている」のに満足出来ない欲求不満状態だ。

（……違う。「足りない」と思うこと自体に苛立ってるんだ）

欠けた部分があるのなら補えばいいじゃないか。

こんな気持ちを知らなかった頃の自分に戻ればいい。

何も感じていなかった頃と、今とではきつと何かが違う筈だ。変わってしまった「何か」を元在った場所へ戻せば良い。こんな簡単なこと誰でも知っているではないか。

（何を当て嵌めればいい？）

パズルだ。わからなければ片っ端から試してみればいい。数学の公式と同じじゃないか。

それなのに、無い。

当て嵌めるべきものが、どこにも無い。以前の自分と、「足りない」と感じる今の自分の違いは何だ。そう自身に問い詰めた所で、冴珠はいつも行き止まる。

何に、飢えている？

満たされないのは何故だ。

（苦しい）

手段はわかるのに、要素がわからない。

結局何も変わらない。

それが、冴珠の苛立ちを生んでいる。

足早に繁華街を抜けると、冷たい風が斬り付けてきた。

頼りない街灯が、日の落ちたかけた歩道にポツポツと浮かんでいる。

牙珠の様子がおかしい。

ここ数日、一真はそう思っていた。『名前』や『言葉』について、妙にややこしい会話をした日から、特に酷いかもしれない。

あの日、校庭で五分咲きの桜を見上げていた牙珠。

一真が振り返った先の霞んだ春景色。その春の中に不自然なほど溶け込んだ人間がいた。溶け込む、よりは同化しようと思い詰めた、かもしれない。

哀しい、寂しい姿だ。

埋まる筈の無い溝を、埋められるのだと言い聞かせているような。その言葉は自分を欺くための詭弁だと本能的に知ってしまったような。

実を言えば、一真はそんな光景を何度か見たことがあった。忘れた頃に不意に目の前で繰り返される情景に、一真はいつも掛ける言葉を見失う。

だが、今回は毎年恒例の『牙珠の落ち込み周期』がやって来た、では済ませられない気がしていた。この数日の間に、一真はぼうつとしているかと思えば、思い詰めたかのように虚空を睨み付けている牙珠の姿を何度か見かけた。

（なんだあれ）

元々牙珠は「かわった」奴だが、付き合いの長い一真ですら短期間でこれほど鈍と鋭に大きく振れる牙珠を見た事はなかった。その雰囲気の違いに首を傾げたくなる。

もつとも、その変調に気付くのは一真のように彼と極親しい者だけのようだった。当たり障りの無い人間に対して何の障害も出ていないのは、まだ新学期になってから日が浅いというのもあるだろう。通常の牙珠の様子というそもその判断基準が周囲の人間の中にまだ備わっていない。

それでも見かねた一真はどうしたのかと尋ねたが、牙珠から要領の良い応えは返らなかった。

「だるい気はするけど、大した事じゃない。多分花粉症の…アレル

ギーを抑える薬の所為だろ」

「眠くなるようなヤツ飲んでんのかよ」

「…多分」

（しばらくほっとくか）

多分冴珠自身は、はつきりと自分が変だと自覚していないのだ。自覚もしていないのに、どうしたと訊かれても戸惑うばかりだろう。それに　どうせ、すぐに元に戻る。大抵そうだ。こっちが心配していても、冴珠はいつの間にか自分で解決してしまうのだ。ケロツとした顔で「そんなことあったか？」と馬鹿にされるのがオチだ。今回も一週間もすれば何事も無かったように元に戻るだろう。

今までの経験からそう判断し、一真は見ない振りを決め込むことにした。

ところがその数日後、一真は自分の読みの浅さを知ることになる。

新入生のための部活動紹介も有ったが、結局どこに入部するのか

中学ではバスケ部に所属していたが、そもそも高校で部活をするのかどうかすら未だ決めていない一真は、S・H・Rを終えるところとさつさと帰り支度を始めた。ホームルームが少し長引いた所為で、終わった途端廊下で待ち構えていた他所のクラスの訪問者が雪崩込んで来る。放課後の教室に溢れる声。その中の聞き慣れた声のひとつが、不意に一真の耳に飛び込んで来た。

「葛くん、この頃元気無いね」
かづひ

一真は思わず肩を揺らした。

「そうなの？元々割と物静かなタイプじゃん」

「そうだけどさ、中学の時となんか違う。あ、ねえ坂本！どう思う？」

「どつって……？」

教室の離れた所から突如飛び火した会話の切れ端に、一真は言葉に詰まってしまった。振り向いた先には同じ中学校出身の女性徒が三人、机を取り囲んで何かの教科のノートを広げていた。

「坂本、昔から仲良いじゃん。うちのクラスにだって時々来てるし、話もしてるでしょ」

彼女達は高校に入ってから面識の出来た者と違い、以前の冴珠を少なからず知っている。声を掛けてきた少女は一真と一度委員会と一緒にになって以来、世間話をする間柄だ。

だが、冴珠と彼女はそれほど親しかつたという印象は一真には無い。二人は『一真を通しての知り合い』という関係だったと思うのだが、その浅い付き合いの人間にまで冴珠は変調を悟られているのだろうか。

何か胸の奥がもやつとしたものに包まれるのを一真は感じていた。

「……そっぴや島田さんも三組だっけ」

「そう。三組はあたしと、葛くんだけだよ。北中出身なのは」

「で、どうなの？葛くん、調子悪いの？」

気遣うというよりは世間話の延長のような彼女らの雰囲気、一真は一瞬迷った後、担ぎ上げた重い鞆を机の上に下ろした。この様子なら冴珠の様子に少し探りを入れても不審に一真も冴珠の様子がおかしいと感じているとは思われはしないだろう。

「あいつ、調子悪いの？島田さん、クラス一緒だったらオレより良く判るんじゃない？」

「そうだ、元氣無いつてどんな感じよ。そんなに調子悪そうなの」
(そうそう、ナイス井上！)

一真の訊きたい内容を訊いてくれた少女に内心でエールを送る。

「調子悪いつていうかさ…」

「いつもギャーギャー騒いでる奴が元氣無いらすぐわかるけどねえ……」

「うっわ、ギャーギャー騒ぐ葛くんなんて、想像つかない。ありえない」

「坂本は昔かなりギャーギャーだったよね」

「おーい…話、逸れてんぞー」

一真の指摘はすんなりとスルーされた。

「中学入って少しマシになったけどさあ」

「オイ！昔の事には触れるなっつーの！オレ、高校では知的キャラで行く予定……」

「無理無理」

「本質は変わらないよ、坂本」

憐れみすらを含んだ視線に、分が悪いのは一真だった。彼女らには小学生の頃……つまりは『ギヤーギヤー』だった（自覚は勿論ある）過去を知られている。

「オレの話は置いてさあ……今、冴珠の話じゃなかったっけ」
出来るだけ弱った声で一真はそう言い、椅子にがっくりと座り込んだ。半分演技で半分本気だ。

あ、そーだ。そうだった、という井上の声が色々な意味でありがたい。

あくまで自然に。あからさまに冴珠の様子を訊ねたくはない。

そう考えていた一真だったが、この流れなら過去を思い知らされるのが嫌で、話題転換した事になるだろう。

傷口をこれ以上広げたくもないし一石二鳥だ、とかなり前向きに一真は己に言い聞かせた。

「で、結局どうなのよ。葛くんは」

「ん 元氣無いつていうか……どこがって言われると困るんだけど。表情が、雰囲気……切羽詰まってる、っていうのかな。大事なテストでさ、後十分しかないのに終わんないってトコ。どうしても解けない問題があつて、しかもソイツをクリアしないとどこにも進めない……みたいな？」

「うつわ、それ結構深刻じゃない？」

「止めてよ、入試の時の恐怖思い出すから！」

「坂本、一番親しいでしょ？どうしたのかと思って」

向けられた島田の視線に、一真は顔が引き攣るのがわかった。

（取り敢えず、笑顔だ）

一真は動揺しつつもすっとぼけた。本能的に誤魔化した方が良い気

がしたからだが、それ以外に方法が無かったともいう。

「オレには良くわかんねーけど……」

冴珠はそう簡単に『知り合い』くらいの他人に異変を悟られるタイプではない筈だ。

（一体何やってんだアイツ）

「今度それとなく聞いとくわ。あ、でも確か花粉症でどこのこののとは言ってたな」

「え、調子悪いのって、マジそんな理由？」

「よっぽど辛いんかな。薬、合わなかったとか？」

「まあでも、花粉症だってんなら安心じゃん」

（……オレは何とも言ってねーけど）

勝手に解釈したのは彼女達だ。

じゃ、オレ帰るわと一真は立ち上がり、

「あ、今のことあいつに言わないでね」

取り敢えず釘を刺しておく。そうでないと冴珠に知れてしまった場合、何故か後が怖い。勝手な事言うなと臍を曲げられそうな予感がある。

彼女らの了解を得て、一真はひらひらと笑顔で手を振った。

教室に背を向けた一真は、笑ってなどいられなかった。

（……何やってんだよ、冴珠）

多分もうそこにはいないと知りつつ、三組へ足を向ける。

案の定、覗き込んだ箱の中には冴珠の姿も鞆も無かった。冴珠だけではない。珍しい事に、三組には誰も残っていなかった。多少雑然と並んだ机と椅子。黒板、教壇、後ろに備え付けられた棚。それぞれクラス毎に微妙に雰囲気は異なるが、どこにでもある教室の風景には違いない。

違う筈の、箱。

しん…とした空間で、黒板の上に掲げられた丸い白盤だけが控えめな音を刻む。

すぐ隣の教室や、グラウンドからは人の声が聞こえてくるのに、こ

こは何かの隙間の様に音を取り上げられている。

「あー…失礼シマシタ」

開けてはいけないドアを開けてしまった気分になって、一真は決まり悪そうに、誰もいない教室に向けてそう呟いた。

帰り道も、帰宅してからも、一真はずっと冴珠の事を考えていた。その事実には気が付き、げんなりする。何でヤローの事をこんなにしつくり考えなきゃならんのだと思うと癪なのだが、一旦廻り出した思考にはキリが無い。

一真の知る葛冴珠という人間は少々のことと動じたり、それを付き合ひの浅い他人に晒すような真似をしようとするタイプではなかった。一番親しい友人と見做される（冴珠本人がどう思っているのかは別としてだが）事の多い一真の目には、そう映っていた。それが。

『葛くん、この頃元気無いね』

確かに、一真も何かおかしいとは思っていたが、それは一真が冴珠と極親しい間柄だから感知出来たのだ、と思っていたのに。

（……珍しいんだよな、こういうことって）

『どうしても解けない問題があつて、しかもソイツをクリアしないとどこにも進めない……みたいな？』

多分、島田の表現は的を射ている。

比較にならないのは問題の大きさだ。冴珠は仮にテストで彼女と同じ状況に陥ったとしても、溜息ひとつで済ますような奴だ。

（そうなんねーのは……）

一真は机の上に広げた課題のプリントを俯瞰する。

スタンドの白い光が数字の羅列を照らし出していた。三分の二までは埋まっているが、頭を半分以上ここ最近の冴珠の様子や何かに使いながら眺めていると、ただの模様になり果てるのが先か、解き切るのが先かは微妙だ。

課題は明日の二限の数1の授業がタイムリミット。

この課題の中に解けない問題があつても、一真はそう深刻にはならないだろう。もし解けなかったら参考書でも何でも見て、解く努力

はする。テストなら時間を最後まで使って足掻いて解こうとするだろうが、それはそれ。悔しかろうが、出来なかったものは仕方ない。次だ、次。

（それはアイツも一緒じゃねーの？）

じゃあ、何故。

一真はシャーペンでこめかみを数回ノックした。

（そうなんねーのは）

多分彼にとって、今抱えている問題がそれ程大きなものなのだ。

毎年、春になるとどうも冴珠が不安定になるのを一真は感じ取っていた。面と向かって指摘をしたことはなかったし、大体数週間もすればその不安定さはすっかり鳴りを潜めるから、一真は「ああ、またか」と大して気にもしていなかったが：今年は一味違うらしい。

『当たり前前の事を確信したくなる時もあるんだ』

あの日の、ややこしい会話。

どうもあれが気になる。

（何が、何だって？）

『お前という『モノ』の存在に貼られた『名前』に、疑問を持ってるって事？』

ありえねーだろ。そう思いながら一真が口にした台詞だったのに。

『……そういうことになるね』

すんなりと肯かれて対処に困ったのは記憶に新しい。

（名前、ねえ）

島田の言葉を借りるなら、彼は『自分の名前』に対する疑問が解けなくて、『ソイツをクリアしないとどこにも進めない』状態に陥っているから、変なのだろうか。

（切羽詰まってる……か）

島田の見解は鋭いと一真は思う。いつになく鈍と鋭に振れる空気。それは確かに、何かのストレスに因るものだと言われれば納得できた。そのストレスの原因はおそらく　あの日の会話の中に現れた『名前』なのだろう。

『モノ』にはそれに相応しい名前が当て嵌められている。

冴珠の真剣な声が蘇って、一真は思わず頭を掻き毟った。

（そんな事言われたってなあ。大体何だよ、疑問を持たないって…
…自分の名前だろ？それ以外無いだろーが）

冴珠はいつも名前を呼ばれる度に、疑問を感じていたのだろうか。
疑問を持つのは、相応しくないからだという意味で、冴珠は話していた。

（…おい）

冴珠は呼びかけられても、それは自分の名前ではないと思っていたのだろうか。

何度も何度も。

名前を聞く度に湧き上がる違和感に折り合いを付けて、返事をするという生活を続けてきたというのか。

（……）

一真の背中が、ずっと冷えた。

『それがわからないから……確認してるんだよ』

寂しそうな、諦めたいのに諦めきれない未練のようなものを、滲ませた声。窓の外に向けた視線の色は、校庭を振り返った時と同じまま。

（何だよ、それ）

誰にも言わずに？

誰にも悟られずに？

本当は自分の名前じゃないと思いつながら、何百、何千回と呼ばれる声に応えて来た？

一真は右手のシャーペンを乱暴にペンケースに突っ込んで、立ち上がった。同時に左手はスタンドのスイッチに触れ、ふっと視界に満ちる光量が減る。

首と肩をぐるぐると回し、どさりとベッドに寝転がった。

見上げた先の天井で輝く蛍光灯が邪魔だったが、そのまま一真は瞼を堅く閉じる。

閉じた瞼の裏で、赤や黄色の丸い模様が動き回っている。

『仕方ないだろ……』

ふ、と耳の奥で随分昔に聞いた冴珠の台詞が蘇った。今思えば、あの日と同じ声音だった気がする。諦めの奥底に、隠し切れない何かを秘めた声。

（何がしゃーない……あ）

そういえば、昔何かなかっただろうか。冴珠が『仕方ない』と言ったのは、何についてだったのだろう。

あれは、いつだ。

『おまえ、何とも思ってたのかよ』

多分、その時一真は怒っていた。

良く晴れた空。肌寒い風が建物と建物の間を甲高い音を上げて吹き付けてくる。

あれも、春か。

未だ春の中に冬の気配が多分に混じった季節だったのではないか。

（あれ、マジ何の話だっけ？ 確か結構酷いこと言われた気が……）

『一真には、関係ない』

（何が関係無かったって？）

『だよ』

あの時冴珠は 珍しく唇を噛んで苛立ちを露にしていた。

思い出せない。

でも あの時も『名前』がどうのこうのと言っていた気がするの
は、記憶違いだろうか。

（わかんねー……）

『表情が、雰囲気……切羽詰まってる、っていうのかな』

島田の台詞を思い出し、一真は唇を引き結ぶ。

（らしくねーぞ、冴珠）

何故、切羽詰まる必要があるのか。

（出さなきゃなんない答えがわかんねえ。もしくは答えの導き方が解らん、のどっちかの場合だろ）

それが解らなくて、その先をどうしても知らなければならぬ時に、人は焦りを覚えるのではないだろうか。ただ、冴珠の場合は『知らなければならぬ』という表現が合っている気がする。知りたい、というよりも何か　脅迫的なモノを抱えているような。

（答えを知らなきゃどこにも進めないっていうなら、焦るのもわかる気がするけど。知りたい内容って……）
名前か。

何故、葛冴珠という名前で呼ばれるようになったか。

どういう経緯で無数にある音と文字の組み合わせから、その名前を選択したのか。

それから　何故自分の名前を呼ばれているのに、それが自分の名では無い様な気がするのか。

「…それってかなり不毛だろー」

思い至った内容に一真は寝転がったまま脱力し、音を上げた。

（そんなんで切羽詰られても、どう解決すりゃ良いんだよ）

全くの悪循環だ。解決法が思い浮かばないのは、冴珠と同じ。彼は既に答えの出ない疑問のループに陥っているということだ。

無意味な呻きを吐き出し、一真は上半身で反動を付けてベッドから立ち上がった。机には向かわず、電気を消して部屋を出る。

妙に人が恋しくなつて、階段を駆け下り明かりの点いたリビングに突入した。

キッチンの母親に階段が抜けたらどうするのと小言を食らったが、一真はへらりと笑って誤魔化した。ソファに座っていた弟の前に立ちはだかり、視線の先のテレビ番組を覗き込む。割と人気のクイズ番組だった。

「カズ兄、邪魔！見えねーじゃん」

「そうか、お兄様がもつと邪魔してやろう！」

「あ！」

一真の台詞と共に坂本兄弟リモコン総脱戦が勃発する。

「リモコン返せ！勝手にチャンネル変えんな！！」

「ホレホレ！悔しかったら取ってみろー」

「いつも言ってるでしょ。お母さんが見えないから、そこで暴れるのはやめて」

対面式のキッチンから投下された母親の呆れた声。兄弟は睨み合ったが停戦には至らず、ソファに座ったまま無言の脚合戦を繰り広げる破目になった。

穴の向こうに広がる世界が
たとえば

明るく美しい花園の様に見えたのなら
目の前の現実を打ち壊し

勝ち取るために彼は迷わず歩き出すだろう

だが

穴の向こうに広がった世界が

もしも

虚無を具現化したような荒廃した風景だったら

周辺の級友たちと弁当を食べながら、一真はこっそり反省していた。昨夜の自分は、三つ年下の弟と脚合戦をした。勿論自分の方が弟より断然脚が長いので、蹴り合い（坂本家において脚合戦は、脚を使つて相手をソファから落とす競技である）は有利である。態々本気になるまでもない。ただ、体格で圧倒的に不利な弟が本気になって、半泣き一步手前位になるように加減をした、という程度の気合の入れ具合だった。

正直大人気ない。

先日『ギャーギャー』だったと評された以前の自分。

そのイメージを振り切つて、知的キャラでいきたいなー等という自らの希望は、幼馴染みの彼女らに一刀両断されたのは記憶に新しい。そして今日、廊下の騒ぎが気になって仕方ない自分。

これは多分…一般的に『野次馬根性』とか言われるものではないだろうか。それが無意識の内に自分の体を動かしているのだ。多分。

だって、悲しいかな女の子がキヤーキヤー言っている内容の中心に、自分が居るわけが無いと知っているのだ。何故なら、声の主は井上と秋田という現クラスメートであり、更にその二人は小学校時代からの御学友でもあったりするのだ。

今更黄色い悲鳴を上げてくれる事なんて、あり得ない。

それこそ長い経験で、そういう位置にいるキヤラクタでは無いと思いき知らされているのに廊下が気になって気になって、一真はうずうずしている。やはりこれは『野次馬』の性なのだろう。

大人気なくて、野次馬で。

今この瞬間までの数日間の様子を自ら省みて、一真はちよっぴり自分の将来像を危惧していた。

やっぱりオレ、一生ギヤーギヤーなんじゃないだろうか、と。

丁度その時だった。

「坂本ッ!!」

声と同時にガラッと勢い良く開いた扉の向こう　　気にしてない振りをしてながら気にしていた扉が開いて、一瞬で廊下と繋がった。

「うえ、オレ?」

柄にも無く微妙な哀愁を漂わせたりした所為だろうか。これは気紛れな神様のドッキリかもしれないと、名を叫ばれてからほんの数秒間、一真は真剣にそう思った。

扉を開け放った声の主　　井上は、頬を高潮させ目をきらきらさせている。

(マジ?何で、何だっつの?)

喜ぶよりも前に、身体が逃げの姿勢を取っているのも、これまでの長い経験故だ。

「モッチ?」

「...モッチって...あ!!」

その井上の後ろから、ひよいと顔を覗かせた女生徒に見覚えは無かったが、古いあだ名に一真は声を上げた。

「凄いでしょ!坂本!美鈴だよ!!」

「さつき廊下でばったり会ったんだよ！」

井上・秋田コンビの声に圧倒されつつ、一真なんとなく状況を掴んだ。教室のあちこちから好奇の視線を寄せられて、一真はさり気無く廊下に移動する。

これは、アレだ。いわゆる幼馴染との感動の（かどろかは個人の判断に委ねるとして）再会だ。

「うわー、かなり久し振りじゃね？」

美鈴は小学校の卒業と同時に隣の市に引っ越したが、一真はそれ以来一度も彼女と会っていない。

「こつちに戻って来てんの？」

「越境した」

「へえ」

「やるじゃん、美鈴」

「皆に会えるかなーと思って楽しみにしてたんだけどね。七組、一人も川上小の子いなくて」

「マジ？七組はひとりいたと思ったけど…三笠がいなかった？」

「三笠は川上西だから、美鈴と面識無いよ」

「あ、そっか」

秋田の言葉に井上は納得した。北中は川上小学校と川上西小学校の生徒で構成されている。

一真は改めて少女・矢野美鈴を見下ろした。昔はショートだった髪が伸びて大人っぽくなっていたが、美鈴だと言われてみれば、確かに当時の名残がくるつとした目の辺りに感じられた。昔は意識しなかった身長差がはつきりと生じていて、びっくりする。暫く会っていなかったから余計だろう。

「モツチ、背伸びたねー。面影無いよ。言われなかったらわかんなかった」

「コイツ、背だけどんどん伸びてさあ」

「井上サン、背だけって余計…」

「中身変わって無いよ、坂本は」

「変わってないのかあ」

「全くね」

先日のおさらいのような会話に、一真はちょっと本気で打ちひしがれていたが、ふと表情を改めた。

（あれ…）

「他、誰がいる？」

「今年、結構川上小いるよ。シマシマとミコと…」

「……お前ら、メシ喰ったんか？」

「あ」

一真の台詞に三人の少女は、同じ音でそれぞれに反応した。教室の時計を覗き込むまでもない。廊下に人が増えてきているのは、皆が食事を終え出した証拠だった。

「やっぱ、七組次体育なの！放課後また来る！！」

「オツケ！うちら皆二組だから！」

走り出した背中にそれぞれに声を掛けて、三人は教室に戻った。

二人はまだ何も腹に入れていないらしい。適当に余っている椅子を引っ張って、秋田が井上の机の上に弁当を載せる。大急ぎで弁当を広げようとしていた井上がポンつと手を打った。

「今度時間作って、同窓会か歓迎会やるっか」

「それいい！」

食べる手を止めないまま、秋田は大きく頷く。二人はかなりのスピードで手と口を動かし、食料を腹に納めながらも、器用に会話を続ける。

「うちの学校にいる川上の生徒の連絡先は大体わかってるけどさ、他所に行った子らはどうする？」

「それはちよつと落ち着いてからにしたらどう？とりあえず学校内で都合の良い子で。日も決め易いし」

「そだね。坂本！」

本日二度目の不意打ちか。自分の席で持参した弁当を平らげ、更に買い込んだハムエッグを頬張っていた一真は、一瞬咽そうになった。

ぐるりと顔を向けると

「んじゃ、男子の方ヨロシク！」

「ん？」

「なにとぼけた顔してんの。男子は四人しかいないんだから、直ぐ連絡取れるでしょ」

「や、取れるけどさあ」

「曜日と時間の候補決めたら言うから、男子は回してね」

「おー……」

女子の勢いに圧倒される形で、一真は頷く。その返事を聞いて、彼女らは再び目の前の弁当をつつき出す。

一真はそれを見て、思わず呟いていた。

「……っーかさ、確かに丸聞こえなんだけどさ……あいつら、オレが会話を聞いていることを疑いもしてねーのかよ……」

「良い関係なんじゃねーの？」

一部始終を見ていた、一真の前の席に座った男子は苦笑している。黄色く霞む晴れた午後空の空。

窓の外を見て、一真は溜息を吐いた。

「やっぱオレ、一生ギャーギャーキヤラ扱いなんかな……」

放課後、三組を覗くと冴珠は丁度帰り支度を終えた所らしく、重そうな鞆を肩に担ごうとしていた。見渡した人の中に島田はいないが、鞆はまだ机の上にあつた。

「よ、起きてるか？」

「……目を洗って来い。ついでに頭も良い物と交換して貰って来い」

「おー毒舌絶好調！起きてんな。ところでさ、島田さんは？」

「島田さん？多分掃除当番じゃないか。あの席、三班だろ」

冴珠が顎で後ろの掲示板を示す。掃除当番表では、今週三班が職員室前の廊下掃除を担当する事になっていた。

「島田さんならもう直ぐ帰って来るだろ。待つてれば」

「や、いないなら良い。さて、冴珠君」

一真の顔を見て、冴珠は心底嫌そうな表情をする。一真は負けずに

胡散臭いと評される笑みを浮かべた。

「……なに」

「折り入ってお願いがあるんですが」

「お前がそういう顔して、そういう声で俺を呼ぶ場合碌なことじゃない。却下」

「話し聞く前から、失礼じゃね？」

「過去の自分の言動を省みるよ」

「や、今度こそ奢るからさ！」

その一言で一真の言いたい事がピンと来た冴珠は、殊更げんなりとした声を選んだ。

「また…？」

「またって二度目じゃん！ブランシュに付き合ってくれ！！」

前回は粘ったが目当てのウエイトレスに会えなかった。一真はそれでも最初の約束通り冴珠に奢る心算だったが、冴珠が「良いよ」と言って結局割り勘になったのだ。

「いなかったら意味無いだろ」

「いーまーすー！調べたんだって」

自信満々の一真の声に、冴珠は半歩身を引いた。

「ついに犯罪者か…ストーリーがここに……」

「ちげーよ！クラスにさ、姉ちゃんがブランシュでバイトしてるってヤツが居たんだよ。それで訊いて貰ったんだって」

凄くね？運命めいたもんを感じねえ？などとひとりのたまう男に、冴珠は呆れ返る。

「俺にはどこからその思い込みと、それを実行に移す情熱が生まれてくるのか理解できないよ…」

「人間ちゃんと会って話してみなきゃ、どんな奴かなんてわかんねーだろ。これは、その人間理解のための第一歩」

冴珠はチラッと半眼を向けた。

「幻滅したらどうするんだよ」

「幻滅しようが更にのめり込もうが、そりゃ結果の話だろ。実際に

会わなきゃわかんねー」

「それはそうだろうけど」

「つー訳で、不審者対策に何卒ご協力をお願いします！話す前からちよつとアヤシイなんて思われたら相互理解なんてできねーだろ？頼む！」

一真は、冴珠が一真の目当ての彼女を好きになってしまふ可能性というものを、これっぽちも思いついていないようだった。一緒に行くという事は、冴珠にだって均等にチャンスを与えているのと同じだ。

更に、相手と親しくなる事で、自分が相手に幻滅される未来だってあり得る事にも触れていない。むしろこの点については考えないように自衛しているのかもしれないが。

（幸せな奴）

「わかったよ」

一真がうつしや！とガッツポーズを決めた。

「ほれ、行くぞー」

一真は勝手に机の上に置かれていた^{こたま}冴珠の鞆を取り上げ、自分の肩に担ぐとさつさと教室を出て行こうとする。彼は背は高いが、どちらかというときひよろりと伸びた（伸びている最中だと本人は言う）体型だから、両肩に大きな鞆を背負うと重心が極端に上がって危なっかしい。鞆をひとつ持つ時よりも配分は均等に近い筈だが、バランスが取れているのかいないのか微妙に見えた。

「……質に取らなくても逃げないけど？ って、おい！ いきなり立ち止まるな」

教室と廊下の境目のドアは突然動きを止めた一真の体と二つの鞆に栓をされた。慣性の法則で鞆の底に体がぶつかりそうになった冴珠は眉を顰める。

「あー言い忘れてたけど」

「何を？」

一真が首を捻って、顔だけで冴珠を振り返った。

「矢野さん、この学校だったんだぜ」

「は？」

どの『矢野さん』だ？と疑問を顔に貼り付け、冴珠は一真を見上げる。視線の先の一真は珍しく真面目な顔をしていた。

「矢野さん、だよ」

立ち止まったままそう繰り返す一真に対し、冴珠は埒が明かないと判断した。

「……鞆返せ。それからドアの間で立ち止まるな。大いに邪魔」

「うおっ！？」

一真の肩から冴珠は自分の重い鞆をひったくるとほぼ同時に、障害物の膝裏に脚を入れて軽く前に蹴り出した。一真の体がバランスを崩し、廊下にとっ…とよろけるようにして吐き出された。転ばな

かったのは、実は見事な反射神経のお蔭だと冴珠は知っている。

「冴珠くん？オレの扱い酷くない？」

「でかい図体して流れを塞ぎ止める奴が悪い。で、誰が何だって？」
酷い酷いと喚く一真に冴珠は改めて問いかけた。一真はどこか不機嫌そうな手つきで、鞆を肩から掛け直した。

「だから」

教室を背にして立っていた冴珠の右手で歓声が沸きあがり、ふと冴珠はそちらに気を取られた。一真もそちらに目を向ける。

二組と三組の間には階段があり、教室一つ分弱の距離がある。その階段付近の空間で何かあったらしく、数人の女子がしゃいだ様子で輪になっていた。良く見れば、その輪の中の一人に島田の姿もある。丁度掃除から帰って来た所だったのだろうか。

「お前、島田さんに何か用があったんじゃないのか？」

「あー、まあ」

一真がガシガシと自分の頭を掻いた。齒切れの悪い返事を不審に思い、冴珠が口を開こうとしたその時。

「あっ！」

二人の姿に気付いた島田が嬉しそうな笑顔で早く早く、というように手招きする。

「？何」

困惑しながらも冴珠は歩き出した。一緒に居るのは井上と秋田と更に数人。島田が後ろを向いているのに気付いたのか、その視線を追い掛けるようにして、輪の中の少女の一人が二人を振り返った。

「葛くん？」

小さいけれど、その声は良く響いた。目を見開いた冴珠の足が止まる。

「……矢野さん？」

良く見れば、その集団は幼馴染と言って差し支えない人々で構成されていた。皆冴珠や一真と同じ川上小のメンバーだ。

「隣の市から、越境して来てるんだって」

後ろから一真の声が聞こえるが、振り返らずに冴珠は再び歩き出した。

「葛くん、びっくりでしょ！私、さっきイノツチからメール貰って知ったんだけど。あ、先に坂本から聞いてた？」

「いや。あいつ、俺を驚かせようとして黙ってたから。酷いよな」

「坂本サイテー！」

「島田さん、もつと言ってやって」

女子からサイテーコールを受け、一真はよろつと壁に手を着いた。ふん、とその様子に鼻を鳴らした冴珠は、矢野美鈴を振り返った。

「びっくりした。 久し振り」

「ほんと、久し振りだね」

向けられた笑顔に、冴珠は柔らかく口角を上げた。

「元気そうで良かった」

「美鈴、大人っぽくなつたでしょー。こんなに髪も伸びてさ」

井上が美鈴の肩に掛かる髪を一房指先で持ち上げて笑う。

「そうかなあ？」

「何たって、私らの美鈴のイメージは小六の時で止まってるし」

「あーそっか。それにしても 葛くんも坂本くんも随分背が伸びたねえ。女の子は大人っぽくなつても面影あるけど、男の子は変わるね。 凄いなあ」

感心したように見上げてくる美鈴に、冴珠は軽く肩を竦めてみせた。

「あいつ、中身は変わってないよ」

「あはは、みんなそう言うね。私も大して変わってないと思うけどなあ」

「多分あたしも変わってない」

「中身がそうそう変わるハズが無いって」

同意する島田や井上に頷いていた美鈴は、くるつとした黒い目を冴珠に向けてきた。

「葛くんは？」

「俺？俺も 変わってないよ」

美鈴の唇が何かを言い掛けたが、続く冴珠の声に掻き消された。

「でも、あいつとだけは同レベルだなんて言いたくないんだけどね」

「冴珠ア！さつきから黙って聞いてれば酷過ぎんぞ！」

「あ、間違えた。年々幼稚になつてきてるから、アレよりはマシかも」

「こーだーまッー！」

対一真にだけ発揮される冴珠の毒舌を止める手段はこの場に一つしかなかったようだ。

「じゃ、オレら寄るとこあつから！またな！」

「あー坂本、逃げんの？」

「うっさいー！」

一真は冴珠の鞆を掴んで、それごと冴珠を集団から引き離れた。

「じゃーねー」

見送る声に適当に返しながら、冴珠は引き摺られるようにして階段を降りる。

「また今度美鈴の歓迎会やるから！」

階段の上から井上の声が降つて来た。

運ばれてきたコーヒーの芳ばしい香りが二人の間に漂っていた。一真はソーサーの上に載せられた銀のスプーンを左手で弄んでいる。

冴珠は机の上で軽くし両手を組んだまま、大通りに面した窓の外を眺めていた。

冴珠と矢野美鈴の間に何があつたのか、一真は明確に知っている訳ではない。

だが一真の小六の頃の記憶では、二人は付き合い合つまでには至らないにしろ、良い雰囲気だったのは確かだ。

冴珠は女子のダントツの人気を得るタイプではなく、好きな男の子の名を順に挙げると三番目、四番目等にちらほらランクインするタイプだった。格別に優しいというのでもないが、誰に対しても分け隔ての無い、割と穏やかな態度。それが冴珠の人気の原因だったのだと思う。派手さは無いが、良く見れば整った顔立ちなのも、一役買っていただろう。

たとえ好きな子として選ばれなくても、間違っても嫌いな男子としてブラックリストに載ってしまうような事は無いタイプだった。実を言えば、一真にはその当時から冴珠の毒舌が浴びせられていたが、それは例外だったらしい。

冴珠のクラスメイト達に対する態度は裏を返せば、特別を作らない一歩引いた態度だが、美鈴と話している時の冴珠は、普段より笑顔が多かったと思う。一真が何と無くその事実に気付いたのは、六年の夏を迎える少し前。

冴珠が特定の女子と親しくなるなんて、珍しいなと一真は思っていた。

二月の終わりに、引越しをクラスメイトに告げた美鈴。

彼女の祖父が去年の夏に亡くなり、一人残された祖母と美鈴の家族が一緒に住む事になったと聞いた。住み慣れた家を離れるのは祖母には負担が大きいだろうという理由で、美鈴が小学校を卒業するのを待って、祖母の家に引越すことになったのだ、と。

当時、一真も冴珠や美鈴と同じクラスだったから、半泣きを隠したような彼女の笑顔を良く覚えている。

割と親しそだった二人の関係が少しずつ、それも歪に形を変え出していたのは、実はそれよりも少し前からだった。多分、殆どの級友達は気付いていなかっただろうけど。

『冴珠くん』

『冴珠くん』

いつの頃からか美鈴が『かずらくん』から『こだまくん』に呼び方を変えた辺りから、『何か』は始まっていた気がしてならない。

一真の動物的ともいえる勘が捉えたその変化は、卒業式を迎える頃には誰の目にも明らかになっていた。

『美鈴は告白するのかな』

『しないかも』

『離れちやうのは寂しいから』

『無理なのかな』

漣の様な漏れ聴こえる会話たちは二人の変化を、転校が齎した「好きだけど、言わない」という、ちよつとした悲恋に仕立てようとしているらしかった。

すぐに別れがきてしまうから

好きだと言ったら、辛いから

気付かない振りで、友達の間係を続けよう

『仕方ないだろ……』

風が吹き消しそうになった、冴珠の小さな声。

あれは卒業式の後の、美鈴や私立へ進学を決めたクラスメイトとのお別れ会の後のことだ。一真は美鈴に対したただの友達のように振舞う冴珠に、腹を立てていた。どうして何も言わないのか理解できなかった。

傍から見えていれば、冴珠も美鈴もお互い相手に好意を持っているのは明らかかな事のように感じられるのに、何故気付かない振りをする必要があるというのだろう。

『言えば良いじゃないか。続くか続かないかなんて、やってみなきゃわからない筈だろ』

一真はそう言つて詰つた。目を伏せた冴珠。びっくりするほど静かな声で『関係ない』と言われたのには、実を言うとかかなりショックを受けた。

誰かの叫びのような風の音が辺りを切り裂く。

『仕方ないだろ……』

風に紛れそうになった諦めの言葉。

（でも、あれは）

好きだけど、離れてしまうから

あの時はそういう意味だと疑いもしなかったが……。

「冴珠」

「……何」

視線を一真に向けないまま、冴珠はパンプリンを一匙掬った。

「下世話な事、訊くけど」

「下世話と判ってるなら、最初から訊くな」

「だって気になるし？」

一真はにやつと人の悪い笑みを浮かべて言った。この程度の切り返して黙ってしまうようなら冴珠とは付き合えないと一真は十二分に知っている。冴珠が何とか言う前に、一真は質問を向けるという先手を打った。

「何で、振ったの」

冴珠はやつと一真の方へ目を向けた。黒々とした瞳はここ数日の不調を引き摺り、どこか虚ろな色をしている。

「主語も目的語も無いな。高校生の質問の仕方かよ」

「へー？入れちゃって良いわけ？」

冴珠は溜息を吐いて、プリンに乗ったスプーンをカチャリと器に戻した。

（あ、仕掛け方マズツたかも）

一真は思わず肩に力を込めて身構えた。これは物凄く怒るか、ぐさぐさと静かな言葉で返り討ちにされるか……。

「俺が、振られたんだよ」

感情を読ませない冴珠の声が、静かに零れた。

誰か

（そこにいませんか）

誰か

（僕の声が聞こえませんか）

誰か

（気付いてくれ）

誰か

（恐いんだ）

誰か

（救けてくれ！）

誰か

（ここから出してくれ！！）

誰か！！

なにか

何かが聞こえる。

誰かの懐かしい声が鼓膜を揺する。

『お前は本当にそれでいいの？』

はい、と応えたはずだ。それでいい、と。

そう応えたと、問いかけてきた彼女はゆっくりと振り返った。赤く燃えながら沈む夕陽に照らされたその表情は良く見えなかった。

少し寒い秋の日。長い黒髪が強い風に煽られて翻る。太陽を映し朱金色に輝く細い糸が空に美しい波を描いた。

『そうか』

最後の足掻きのような強烈な陽光を背負った彼女は、こちらを見詰めたまま沈黙を選択した。光の中から強い視線を向けられているのは分かる。

暫くして再び凜とした背を見せた彼女から、澄んだ声音を静かに向けられた。

『お前は、少し……迷いを知れ』

ああ、かの言葉は 彼女の言霊は未だ生きている。きっと、わたしは彼女の呪縛を受けてしまったのだ。

彼女の思念はこの身に降りかかり、今も囁かれ続けている。

(……何だ、夢か)

冴珠は目を閉じたまま、覚醒を自覚した。

視覚を使わずにあたりの様子を把握してゆく。布と毛布の感触で、ここが自室のベッドなのは明らかだ。瞼の肉を透かしてまで届く光は微塵も感じられない。カーテンを引いた覚えはないし、いつの間にか日は沈んで暗くなってしまったのだろう。布団からはみ出た肩が少し肌寒い。寝返りを打ちながら冴珠は声も無く笑った。

夢を見た。

おかしい夢だった。

ここ数日、どうも妙な夢を見ている気配はあった。残念な事に目が覚めると同時に忘れてしまうのか、内容をさっぱり覚えておらずもやもやとしていたところだった。

『お前は本当にそれでいいの?』

(……初めてちゃんと声聞いたのか)

夢で交わされた会話や情景まで鮮明に覚えていたのは今回が初めて

だった。本当は今日以前の夢で、彼女と何か言葉を交わしていたのかもしれない。冴珠が覚えていなかっただけの可能性もあるのだが、掴み所の無い会話。

（何に迷えって？）

見たことも無い他人が一体何を言い出すのやら。

冴珠はもう一度寝返りを打つと、布団を引き上げ、頭を潜り込ませた。

『ごめんね』

『ごめんね』

（矢野美鈴……）

夢の中の凜とした声は、いつの間にか別人の声にすり替わっていた。言葉と一緒にあふれ出した涙が、美鈴の頬を伝っていく。それをじつと見ていた自分。

公園の地面に幾つもの水滴が茶けた染みを描いた。

耳を布団に押し付けても、記憶の声は消せなかった。

折角ブランシュの『テラダチトセ』さんが居る時間帯を狙って行ったのに、結局違う事で手一杯になってしまった。一真がああ質問の後、とても居心地の悪い時間を過ごす羽目になったのは言うまでも無い。心臓にぐさぐさと刺さる言葉で罵られるのを覚悟したが、どれだけ待てど、冴珠は一向に怒りの言葉や感情を向けてこなかった。それだけでも普段とのギャップがあり過ぎて居心地が悪いのに、当の冴珠はただぼんやりと窓の外を眺めている。

それはもう、新手の嫌がらせかと思いたくなる位、見事に自分の世界に没入していた。

冴珠は不意に現実に戻ってはスプーンを取り、ちいさなプティング

を一時間以上かけて無言で食べ終えた。それを見届けた時は、良くやったと感謝して拝みたくなっただくらいだ。冴珠を急かして店から退散したが、一真の折角の目論見空しく、無言の男子校生二人組は不審者リストに載ってしまっただろう。

そして今、一真は先日 of 光景再びといった状況にはまり込んでいる。一真は数学の課題を目の前にして、無意識に冴珠のことを考えている。

(マズった)

右手にシャーペンを持っているが、それは親指と人差し指の間で旋回をし続けているだけで、鋭く飛び出した鈍色の芯は少しも減らない。

(だって、まさかさ)

『俺が、振られたんだよ』

中学になってから二人の噂は偶に囁かれていた。冴珠が振ったという話もあったし、告白も何も無かったという噂もあった。向こうの学校で美鈴に彼氏が出来たというのも聞いたし、冴珠が川上西出身の生徒に告白されて付き合っていたのも知っている。でもその中に美鈴が冴珠を振ったという話は一度も出てこなかった。

だからこそ『冴珠が美鈴を振った』という話を鎌をかけるための材料として選んだのだ。

好きだと伝えるように言った一真に『仕方が無い』と応えたのは、美鈴に振られていたから？

辻褄は合つし、あのどこか逼迫したような、切なさを含んだ声に相応しい背景だとは思つ。

(でも……ぜってー違う)

一真は自身の動物的な勘についてかなり自信を持っている。根拠が無いと言われれば反論できないが、それは一真にとって大した事ではない。

わかんねーなら、わかるまで黙って見てろ。

結果的にそれを外した事は無いから変える事も無い。

校舎の間を擦り抜ける、嘆きのような鋭い風の音。

『……だよ』

唇を嚙んで俯いていた冴珠。あの時の冴珠の台詞を思い出せない。問い質せば『名前』がどうの言っていた筈だ。聞いた時には冴珠の言葉の訳が分からず、腹が立ったただけだった。

（あの時も、きっと何かあったはずなんだ）

少しずつ歪な関係になっていった冴珠と美鈴。二人が親しくなればなる程、美鈴と居ると笑顔が多かった冴珠の表情は強張っていった。そしてそれを反射したかのように、美鈴の笑顔もぎこちなくなつて。どうしようもない悪循環を繰り返した後、二人は何事も無かつたかのように友達として別れた。

諦め切れない、けれどどうにもならないと知っている眼差し。

『表情が、雰囲気が……切羽詰まってる』
似ている。

単なる偶然だろうか。三年前の冴珠と、今の冴珠の雰囲気は良く似ていると思うが、当時と今では抱えている問題は全く違うものの可能性もある。

『どうしても解けない問題があつて、しかもソイツをクリアしないとどこにも進めない……みたいな』

（でも…今アイツが切羽詰ってるのは『相応しい名前』についてだろ）

あの、どうにも不毛な問題だ。一真に言わせれば解ける筈の無い問題。それは冴珠も十分理解しているようだった。

（でもその名前にしたって…何で今更なんだよ）

いつの頃からかは一真には分からないが、冴珠はずっと自分の名前について疑問を持っていたと言っていた。それが何故ここ数週間

特にこの数日間で、極端に悪化しているのか。

（やっぱ、それなりに悪化するような理由があるんじゃないのか？）
どうして人は焦るのか。

（知らないやならない……から？）

最近頻繁に思い出す島田の言葉を反芻して、一真はハタと気付いた。そうじゃない。もっと根本的なことがある。時間だ。

時間に限りがあるから急かされるのだ。止められない時との闘いだから焦るのではないか。期限が切られているからこそ、それまでに問題を解決しなければとプレッシャーを感じるのではないだろうか。一真はそこまで考えて我に返った。

「あんの大馬鹿！」

思わず声に出して毒吐いていた。あまりの馬鹿馬鹿しさに、うつかり回転を掛けすぎたシャーペンが跳ね飛び、壁にぶつかって床に転がり落ちた。

（お前、バカだろ）

一体何に焦る必要があるというのか。知人程度の人間に異変を悟られるような「失態」（普段の冴珠なら、自身の振る舞いについてそう断ずるだろう）を犯すほど時間が無いと？

（なんか、オレまで思いつきりマヌケな氣イしてきた）

これ以上黙って見てはいられない。

何といっても、彼らしく無さ過ぎるのだ。

本人が自覚していないのをどう言えば伝わるのか自信が無いが、傍観はもう止めた。兎に角自分の居心地が悪い。

（明日言おう）

焦る必要は無い筈だ。お前には時間があるだろうと。

本当は　それこそ小学生の頃から、冴珠がずっと『何か』に悩んでいるのを知っていた。それが『名前』絡みなのは、もう間違いないと思う。

だがそれは時間がどうこうできる類のものではなく、彼自身の感覚の問題だ。麻痺してしまうしか方法が無いものだ。今更焦ったってどうしようもない。

（冴珠）

ふと一真は不思議に思う。自分の傍らに彼が居るようになったのは、

いつの頃からだろう。

翌日の昼休み、放課後の約束を取り付けてやろうと意気込んで三組に乗り込んだ一真は、予想外の展開に頭を痛めることになった。

「冴珠、おーい！冴珠くん？」

反応がない。一真がわざとらしく正面から覗き込んで、手をヒラヒラ振って見せても、冴珠の目は動かない。

実を言えば一真が乗り込んだ時、冴珠は教室にいなかった。暫くしてどこからか戻って来たは良いが、すくとんと席に座ったままこの状態。恐らく弁当も食べていない。

（おいおい……見えてねえって事かよ）

これは本当に予想外というのか予定外というのか……そんな選択肢は全く一真の頭の中に無かった。

彼の昨夜から練り上げた「居心地改善企画」では、事態はもう少し平穏だった。ブランシュは流石に使えないから、教室でも歩きながらでも良い、冴珠の蟠りを言葉にさせ、その上で「そういう問題じゃない」という事を気付かせよう　という計画だったのだ。

冴珠は結構捻くれているから考え得る反論は出来る限り考えて、それに対する手段（というのか詭弁と紙一重かもしれない説得）を立ててきたのだ。それこそ数学の課題を放り出して。

「冴珠！！」

「…あ、何？」

殊更強く名を呼ぶと、冴珠は漸く初めて呼ばれたかのような反応をした。

「おまえ……大丈夫なのか」

思わず滑り出た一真の言葉に、

「何が」

心底不思議そうに伝える冴珠を目の当たりにして、一真は心がすうつとするのを感じた。

（コイツ誰だよ）

らしくない、なんて可愛いもんじゃない。

コンプレックスを抱いているらしい「自分の名前」を呼ばれて、気付かないなんて事があるのか。いくら冴珠が一真の声を聞き慣れているとしても、名前に違和感があるなら呼ばれると多少なりともストレスが掛かる筈だ。

それが。

「おまえさあ、どうしちゃったわけ」

気の抜けたような声でそういつて、一真は床にだらしなくしゃがみ込んだ。

「どうつて」

「冴珠？」

「……？」

冴珠は一気に視点が低くなった一真を見下ろし、不思議そうに目を瞬かせた。

「…マジどつかおかしいんじゃない？…つて、おいっ！どこ行くんだよ！？」

突然立ち上がった冴珠に一真は慌てる。

「………帰る」

呆気に取りられる一真の前で冴珠はさっさと帰宅の用意をし出した。

「帰るつて」

「何か体が怠いんだ。この間から耳鳴りが煩いんだよ。さっきちゃんと保健室で許可証貰って来た」

（おいおいおい………！）

冴珠はその日、五時限目を受ける事無く早退した。

冴珠は普段乗らない時間帯の電車に乗り込んだ。

当然ながら朝の鮎詰め状態や、夕方の学生天国とは大分様相が違った。車両に人影はまばらでどこにでも座れる。冴珠は陽射しが入らない方の七人掛けの座席の端に深く腰掛けた。後ろの壁に頭を預ければ、電車の振動が直接骨に響く。

体が怠いのは、本当だった。

少し頭も痛い。

冴珠は目を閉じる。家に帰るには半時間程この電車に揺られなければならぬ。ゆっくりと加速してゆく列車。レールの継ぎ目の上を車輪が通る度、規則正しく音が変わる。

数日前から急に気になりだした耳鳴りが少しだけ紛れる気がした。

耳鳴りは何かの言葉のようにも聞こえるし、ただの雑音にも思える。

『かすら
葛くん』

さつき下駄箱へ向かう階段の途中で美鈴と擦れ違った。昼休みの最中でそこそこ人もいたが、美鈴の声は雑音に紛れなかった。相変わらず、彼女の声は大きくも無いのに　響く。それは昔から変わっていない。

『ごめんね』

あれは、冬のこと。

冴珠にとって美鈴は、あの当時一番親しかった女子と言って差し支えないだろう。お互い意識していたにせよ、付き合うとかそういう話にはならなかったが　繁華街に一緒に出掛けるといったデートの真似事をした事は数回あった。彼女と一緒に過ごすのは、楽しかった。

美鈴の祖父が亡くなったのを、冴珠はクラスの友達より早く知っていた。家族の中で引越しの話が持ち上がっているのも秋には聞いていた。

彼女に引越しの話がなければ、ふたりの関係はもう少し違ったものになっていたかもしれない。

美鈴は多分　焦っていた。引越しの話を聞いた冴珠も相当ショックを受けたと思うのだが、当人には及ばないだろう。今まで過ごした家から祖母の家へ。

彼女を取り巻く周囲の環境が大きく変化するのは間違いない。「隣」の市と言われたってローカル電車で一時間近く掛かる。

『葛くんが、好きだよ』

秋の真つ赤な夕焼け空を背景に、美鈴はなんでも無い風を装って言った。

休日のデートの真似事の帰り道。

その数週間前に、冴珠は引越しの話を聞いていた。先の見えないこれからをどうやっても意識から遠ざけられず、二人とも感傷的になっていた。東の空は既に暗い紫色に染められていたがお互い帰る気にはなれず、繁華街の近くにある大きな公園に寄り道をした。時間を止められない人間の、小さな抵抗だった。

公園のベンチに座った冴珠の前に立って、小さな手を握り締めていた美鈴。少し離れたブランコや遊具では子供の元気な声が響いている。芝生を敷き詰めたグラウンドでは親子連れや友人同士の楽しそうな姿があった。ぼつぼつと置かれたベンチには人がいるものもあったし、そうでないものもあった。

呼ぶ声に、顔を上げる。

（昨日の夢は、この記憶の所為か）

赤い夕焼け。振り返る少女。眩しさに目がくらむ。響く　　声音。

あの引越しがなければ好きだとは言わず、生温い心地良さを保ったまま友人以上恋人未満の関係を続けようとしたのではないだろうか。美鈴は　好きだとは言ったが付き合おうとは言わなかった。

ただ、名前で呼んで良い？と彼女は言った。

「呼んでるよ」

低くも高くも無い澄んだ声に、冴珠はハッと目を覚ました。いつの

間にかすぐ隣には小さな子供が座っている。

(…今の…耳鳴りか?)

多分小学校の二、三年生位だろうか、黒いハーフパンツからのぞく細い脚は床に着く程成長していない。その脚を電車に合わせて軽く揺らしながら、利発そうな顔をした子供は茶化した色の瞳で冴珠を見上げてきた。さっきの声はこの子供の声だろうか。

不意に天井のスピーカーからアナウンスが流れ、下車する駅に間もなく到着する事を知る。減速する列車に合わせ、冴珠は重い鞆の取っ手に腕を通し直し立ち上がった。

音を立てて両側に寄せられる扉をくぐり、冴珠はホームに降り立つ。生ぬるい風が横から纏わり付いてきた。

口を閉じて動き出した電車を振り返る。声を掛けてきた子供がガラス越しにちらつと冴珠を見て、小さな笑みを浮かべる唇で何かを呟いたように見えた。

(…う い ?)

列車はどんどん加速してゆき、すぐにその子供の姿は見えなくなつた。

改札を抜けて駅のロータリーの前で、冴珠は訳も無く空を見上げた。少し濁った空に、まだ満ちきらない白い月が浮かんでいた。

「葛くん、やっぱり調子悪いの?」

放課後、どこか心配そうな井上に話し掛けられ、一真は内心溜息を吐いた。

「わかんね」

「早退したってシマシマ言ってたよ。顔色悪かったって」

「怠いつつて昼飯食う前に帰った。よつと」

一真は声を掛けて重たい鞆を肩に担いだ。反動で体がふらつと泳ぐ。

「あんたそれじゃ年寄りだよ…」

「しゃーねーだろ。マジ重いし」

一真としては気分もあり宜しくないのですが、掛け声でも掛けなければやってられるか！という心情なのだが、当然井上にはその辺の事情はわからない。

「あ、歓迎会、来週の日曜の放課後になりそうだから」

「わかった。伝えとくわ」

じゃあなと言つて、一真はひとり駅までの道をとつとつと歩く。新たに揃える様に指定が有った辞書を買うため、駅へ向かう途中にある大きな本屋へ寄らなければならぬ。辞書を買つと鞆が重くなるのは必然で一真は更に気分を沈ませた。いつそのこと二冊揃えて置き勉という手もあるが、それには母の金銭的援助が必要だったし、今日この重い鞆を抱えたまま二冊も買う気にはなれない。

本屋のガラス製の大きな自動ドアをくぐると、紙とインクのおいに満たされた独特の空気が広がっている。一真は二階の学生コーナーで目的の古語辞典を入手し、のろのろと階段を下りる途中、一階の文庫本のコーナーに美鈴の姿を見つけた。美鈴は一真が店に入つて来たのを知っていたのか、一真が美鈴を見るより先にこちらの方を見ていたようで目が合うと笑顔で手を振られた。

「何見てんの？」

「んー古文の先生のおススメシリーズ」

美鈴が手にしていたのは『竹取物語』。棚の空白の横を見ると『狭衣物語』『源氏物語』『落窪物語』などの日本の古典文学作品の名が並んでいる。美鈴によると、このシリーズは原文と先生曰く『わかり易い』訳が付いているらしい。試しにぱらぱらと目を通せば、古文を敬遠気味な一真でも読めたから、あながち眉唾でもなさそうだった。

「順番に読んでいこうかと思って」

「竹取物語って物語文学の一番古いヤツだっけ。中学でやったなあ」

「教科書一緒だったのかな。私もやった」

「マジ？これ結構シニールな話だったよな」

昔々で始まる、いわゆる御伽噺としての『かぐや姫』は勿論一真も知っていたが、中学で習った『今は昔、竹取の翁といふものありけり』で始まる『竹取物語』は、知っているようで知らなかったものだった。

竹から生まれた美しい少女。求婚者に無理難題を吹っかける絶世の美女。満月の夜月の使者が来て、おじいさんとおばあさんとの別れを悲しみながらも泣く泣く帰っていく。

大雑把に流れだけを見れば『かぐや姫』も『竹取物語』も大差ない。だが、子供用に脚色された『かぐや姫』と『竹取物語』とではやはり違う部分もある。

奥が深いというのか 求婚者には実在のモデルがいたり、内容から筆者は朝廷の権力者に否定的だったといった話を聞いて、一真は昔話も結構やるなと感心したのだ。

「あんなに帰るの嫌がってたのに、あっさり天人に戻っちゃうしねー」

美鈴の口から天人という聞き慣れない言葉を聞いて思い出す。そういえば一真が一番驚いたのは、これは日本で一番古い宇宙人の物語なんだぞ！という先生の台詞だった。

「かぐや姫は何で天人に戻ったんだっけ？」

「羽衣を羽織ると人の心を忘れちゃうらしいよ。羽衣って特別だったのかも。他の話でも天女の羽衣を隠して、返さない話あったし」

「それ、結婚したけど隠してた羽衣が奥さんに見つかって、奥さんが結局帰っちゃうヤツ？」

「そうそう。色々パターンあるらしいけど 天人に戻るには何かアイテムが要るって事なのかなあ」

買ってくるねと美鈴はレジへ向かう。一真は一冊分ばかりと空いた棚を見下ろし呟いた。

「アイテムねえ……」

天の羽衣が人と天人とを分けているなら、それを纏えば人は天人になれるというのだろうか。

（ありえねー）

一真が出口に向かうのと美鈴が会計を済ませたのがほぼ同時だった。並んで店を出ると途端に強風が吹きつける。日陰は未だ寒く二人は身を縮ませた。

「そうだ。昼休みに葛くんに会ったんだけど、モッチは早退したの知ってる？」

髪が乱れるのを手で押さえながら、美鈴が一真を見上げてきた。

「体辛そうだったけど、大丈夫かな」

「…わかんねー」

昨日冴珠から聞いた台詞が、どうにも一真の反応を鈍らせている。

美鈴は本当に冴珠をふったのだろうか。あの時の二人の雰囲気は本当にそういうものだったのだろうか。

「どうしたの？」

「や、何でも……」

言い淀んだ一真に、美鈴は足を止めた。つられて一真も次の足を踏み出せなくなる。

「もしかして私と、葛くんのこと？」

あまりに直球過ぎてそれだ！とは言えず、一真は決まり悪そうに頭を掻いた。

「あー…もう、終わった事なんだろう？」

「そ。振られちゃった」

「は？」

瞠目する一真に美鈴は苦笑した。

「私じゃ、駄目だったんだ」

誰が
誰が
誰が

望んで壊した壁の向こう

広がる世界に裏切られた者は、絶望に足を踏み出す気も萎えたのか
元の場所に力無く座り込み、うなだれたまま膝に顔を伏せていた

「私じゃ、駄目だったんだ」

「それマジ……？って、うおッ」

突風に背中を強引に押され、二人は再び歩き出した。一真は斜め前
を歩く美鈴を見下ろしながら 逡巡した。会話をどの方向に運べ
ば良いのか、さっぱり見当が付かない。

結局一真は自分の口に任せる事にした。

「っーか、良くわかったな」

正直一真は、美鈴に正確に迷いを言い当てられかなりヒヤツとした。
一真の内心の焦りを知っているかのように美鈴は可笑しそうに目を
細めた。

「実はねえ、昨日イノッチやシマシマ達にも訊かれたんだ。『そう
いえば、結局葛くんかずらとどうなったの』って。さっきのモッチはそ
れと雰囲気似てたから」

美鈴の種明かしに一真はへらつと脱力した。

（井上……おまえ、直球勝負かよ）

女子同士だから出来る技なのか、井上故の言動なのかは判じ難い。

ただ一真には真似できない芸当だったのは確かだ。それにしても、
と一真は思う。

（アイツらも 覚えてたんか）

一真は美鈴の顔を見るまで、二人の事をすっかり忘れていた。大体
二人がどうのこうのという噂が流れたのも、中学の最初の一年間ま
でだった。その間に^{こたま}冴珠に彼女が出来た事も影響しているのだろう。
ただ 冴珠は中二の夏に二人目の彼女と別れてから、誰ともそう
いった話にはなっていなかったが。

懐かしい顔ぶれや過去の話題がぽんぽんと飛び出ても、すぐにはピ
ンと来なかった。美鈴の『他、誰がいる？』という台詞に触発され
るまでは、酷くぼんやりとした『何か』が一真の頭の奥の方で引つ
掛かっていただけだ。それがあの台詞に釣られて、小学校時代から
のメンバーの顔をパパパツと思い並べた時に あっと思った。
美鈴と冴珠の組み合わせ。

偶然その前日に思い出した冴珠との小さな諍いも、一連の記憶とし
て繋がった。

『……お前ら、メシ喰ったんか？』

一真は態と話題を逸らした。何故と理由を問われても一真は答えら
れない。本能的に、そこで冴珠の名前を出したくなかった、としか
言えない。

「モッチは昔から葛くんと仲良かったから、何か聞いてない？」

「や、アイツそういう事あんまいわねーし……」

そうだね、と美鈴は頷いた。

「あーあ。イノッチ達には何も無かったよって言っちゃったんだけ
ど、モッチも何も聞いてないなら、そう言えば良かったかなあ」

美鈴は悪戯がバレた子供のような表情で一真を振り返り、そう言っ
た。

「今更だから訊くけど 付き合ってた？」

一真はほんのちょっぴり迷った後で、結局好奇心を優先させてしま
った。

「うっん。離れちゃうとか、遠い、とか色々考えちゃって、結局そんな事言えなかったし。今思えばこうやって同じ学校に通えるんだから、大した距離じゃないんだろっけ。でも　あの時は物凄く大きなものに思ったよ」

だろっなあと一真も思う。お別れ会の時、クラスの女子は遠い、寂しいと言って泣いていた。卒業式という涙の異空間にどっぷり浸かった後だったから、男子も女子のすすり泣く声に結構もらい泣き（本当に泣いていたって、格好付けようとした年頃だった。多分今もだろっけれど）させられていたのだ。

思い出せば「卒業式なんて何でもねーよ」と粹がっていた男連中だつて、式が終わる頃には皆鼻をぐずぐずさせ、隠れて赤い眦を擦っていた。『君達はここを卒業し、ひとつ大人になるんだ』と言われても、どうもあの儀式では「別れ」や「郷愁」といった胸をぎゅつと締め付けられるような感情ばかりが意識されていたように思う。楽天的な一真ですらそういった感情に逆らえなかったのだから、あの儀式の独特の切なさは大きな力を持っていたのだろう。だから、と美鈴は続けた。

「付き合つとかそんなのは置いといて、ただ特別になりたかった…違つかない。特別だつて、実感したかったのかな。欲張り過ぎちゃったんだ、きっと」

「その特別つてさ、どういう特別？ 冴珠にとって……や、何でもない」

一真から見れば美鈴は十分、冴珠の特別だったと思う。ただそれをストレートに美鈴に告げて良いものか、迷った一真は笑って誤魔化した。美鈴もそれを見て少し笑った。

「あの当時、女の子は殆ど『かずらくん』って呼んでたでしょ」それは冴珠に限った話ではなかった。他所の学校はどうなのか知らないが、川上小の女子は大抵男子を渾名か名字に君付けで呼んでいた。一真だってあの当時は一応『坂本くん』だったのだ。中学に上がって直ぐに呼び捨てに変わったが。

「男子は結構名前呼び合ってたけど、女子で『冴珠くん』って呼んでたのはほんの数人だったじゃない？」

「あーそうだったかも」

「ちょっと、羨ましかったんだ」

（あ……）

一真の中でそれぞれが曖昧に組み立てられていた情報のピースが、ぱたぱたと一つの過去の姿を描き出してゆく。

名前。

美鈴。

『だよ』

（冴珠）

一真は歩く速度は変えないまま、白くかすんだ空をゆっくりと見上げた。

（おまえ…美鈴の事、本当に好きだったんだ）

なにかがきこえる。

早退して帰宅した冴珠は一応、病人らしくベッドに横たわっていた。とにかく身体が重い。だが病気かと言われると、どうも違うような気がするが　あまりのだるさに任せ冴珠は結局目を閉じる。

そうして静かにしていると、冴珠の耳は様々な音を拾う。家の前のを走る車のエンジン音、空をゆく飛行機、学校帰りの小学生の声。あらゆる雑多な音に紛れて、ひとつ。この高く、ささやかな音は耳鳴りだ。

ここ数日の間に、耳鳴りはだんだんとはっきりした音に変わってきていた。耳鳴りは脳に関係が有る場合もあると、聞いた気がする。どこかに異常があるのかもしれない。

だが冴珠は不思議と不気味さや恐怖は感じなかった。

『冴珠くん』

いつの間にか美鈴の声が、耳鳴りに溶け込んでいる。

（もう、終わったことだろ）

布団の中で、少し体をずらした。かすかにベージュを含んだ白い天井をぼんやりと見詰めて、冴珠は思う。ほぼ三年振りに再会した美鈴は笑っていた。それで十分だ。

あの秋の日、名前を呼んで良いかと言われ、冴珠は　ほんの一瞬躊躇した。それは本人の意識に上るか上らないかの微かな心の動きだったから、気付けなかった。

『良いよ』

そう、返事をした。美鈴が嬉しそうに破顔し、冴珠も目元を緩ませた。

日が暮れて急速に気温を落ち込ませるバス停に二人で並び、定刻より少し遅れているらしいバスを待ちながら、冴珠はふと公園を振り返る。暗い影のように姿を変えてしまった木々が、公園を縁取っていた。

紫の闇の中で街灯が点々と抵抗している。

目を上げれば、地上の事など素知らぬ振りで、輝きを増し始めた月が東の空に浮かんでいた。西の空は微かに赤く、あの鮮やかな色彩を静かに喪おうとしている。

冴珠は少し前まで自分達がいた公園の光景を思い出す。

きらきらと輝く瞳で真っ直ぐに自分を見詰める少女。夕焼けに紛れそうな、少し照れて赤くなった頬。

『好きだよ』

その視線もその言葉も、美鈴の意識の全ては確かに自分に向けられていた。

（終わったこと、だろ）

もう一度冴珠は自分にそう言い聞かせる。それでも回想は勝手だった。もう長い間思い出していなかったあの日の記憶をわざわざ引つ

張り出してくる。

『冴珠くん』

『え…』

後ろから、大事な物を扱う様な声で美鈴が初めて名前で冴珠を呼んだ。

美鈴の唇から届いた澄んだ声に冴珠は振り向き、ゆっくりと瞬いた。美鈴は さつきよりずっと照れているようで、うわーと言いながら頬を両手で押さえている。

（それは、誰のこと？）

（美鈴は誰を呼んでいるんだろう）

一瞬極自然にそう思ってしまったって、冴珠は自分にぞっとした。

（何考えて…目の前の自分に決まってるだろ！）

冴珠は慌てて言い聞かせる。

不意に、心の奥底で飼っていた魔物が卑しい笑い声を立てた。心の内に潜んでいたそれは、体半分くらいするりと抜け出して背後から冴珠に耳打ちする。

『いつかこうなる筈だったのさ』

冴珠の混乱を予期していたかのように、魔物ははしゃいでいた。胸の内側を鋭い爪で悪戯に突き、囁く。

『わかつちまつただろ？それはオマエの名前じゃないよなあ』

ごくりと喉を鳴らし、冴珠は大きく息を吸い込む。そんな馬鹿なことがあるか、と辛うじてその声を無視した。

その後 暫くは冴珠も上手く自分を繕えた。

（この間のはきつと僕が慣れていないせいだ。美鈴の呼び方が少し
ぎこちなかったせいなんだ）

『冴珠くん』

笑顔の美鈴。クラスメイトの何人かは呼称の変化に敏感だった。軽
くからかわれたが冴珠は特に気にする素振りも見せず、自然に返事
をしてみた。

『冴珠くん』

『冴珠くん』

振り向くのが少しずつ苦しくなる。

美鈴に名前を呼ばれる度に嘲笑う魔物は大きくなり、心の内側で膨
れ上がる。

『無理だつて』

『足りないんだよ』

美鈴は 僕を呼んでいる。

その筈なのに、何故か苦しい。

『オマエには大事なものが足りないんだよ』

（僕には 何かが足りない、のか）

『そうだそうだ！やつと気付いたか！！』

（違う、違う！そんな馬鹿なことは無い。どうやったって馬鹿げて
る。第一何が足りないっていうんだ）

幾度も否定を繰り返した。その度に魔物は認めちまえよと冴珠を唆
す。

『強情だなあ。足りないんだつて』

（何も考えるな。相手にするな！）

魔物は気紛れで、その声を途切れさせる事がある。日増しに騒がし
くなるそれがはたと気配を消し、頭の中に冴珠だけの空白の時間が

取り戻される。

それは、久々に取り戻したひとりの時間だった。訪れた静寂に、冴珠はただ安堵していた。本当は　こういった時こそが恐ろしいのだと、冴珠はその時気付いていなかった。

家族、親戚、友人や教師など…今まで出会った多くの人に名を呼ばれたが、その誰もが冴珠の名前を呼んでいない。

それはもう誤魔化しがたい事実のような気がした。あの数年前の春の日に違和感を自覚してから冴珠は飢え続けている。あの魔物が言うように何かが「足りない」と感じている。

（でも、もしそうだとしても　）

彼女なら　美鈴なら。

空白に向かっている外れな名を投げられているような、この虚しさを埋められるんじゃないか。

冴珠はそう思った。そうであって欲しいと願った。

あの時、気配を隠した魔物は腹を抱えて笑っていたのだろう。破綻は時間の問題だったとしても、思考を整理したからこそ現実との落差をより感じてしまうのだ。

『冴珠くん』

綺麗な声。

きらきらとした瞳。

花が咲くような笑顔。

美鈴なら、呼んでくれるんじゃないか。

『冴珠くん』

（……どうして）

どうして、　美鈴は『僕』を呼んでいないんだろう。だって、あんなに澄んだ声で呼ばれているのに。目を見て、目を合わせて、僕を見て嬉しそうに笑うのに。

（誰の、こと？）

誰を呼んでいる？

自分に大事なものが足りないから、駄目なのか。呼ばれても、呼ば

れていない気になるのか。

寂しい。苦しい。目の前が真っ暗に塗り潰され、思い知らされた。魔物の言う通りだ。自分には何かが、「核」とも言うべき何かがある。とばかりと抜けている。

僕には『中心』が無い。

足りない。

どこにも無い。

美鈴は間違いなく僕を呼んでいるけど、僕の足りない部分を呼べていない。そこをちゃんと呼ばなければ、僕という存在は満たされない。

美鈴が呼んでいるのは 僕じゃない。

真冬の寒気が流入した二月のある夜、冴珠は家のベランダに座り込んでいた。月が辺りの屋根や道を真っ白に照らしていた。ごうごうと吹き荒れる北風、腰を下ろしたコンクリートの冷たさに体温を根こそぎ奪われ、指先が悴んで感覚が無くなる。冴え渡る凍えた星空。目頭と噛み締めた唇だけが熱い。

来週美鈴は引越しを告げる。後、ひと月だ。訪れる現実の空虚さに冴珠は叫び出しそうだった。

(どうして…)

『自分を誤魔化すのも限界なんだよ。気付いてたんだろ？ 本当は誰も自分の名前を呼んでいないって。名前を付けたオマエの家族ですらオマエの名前を呼んでないんだよ』

もう、五月蠅い魔物に反論する気にもなれなかった。そもそも何故こんなおかしい感覚を持ってしまったのだろうか。

『ごめんね 困らせちゃったね』

冴珠が少しずつ追い詰められるのを、美鈴が一番感じていたに違いない。美鈴は既に以前の『葛くん』に呼び方に戻していた。

もう、時間が無い。冴珠はどうして良いのか分からないまま、美鈴

との別れの日を迎えた。

（ごめん）

美鈴は何も悪くない。ただ冴珠は己の事で精一杯で、それを美鈴に伝えられなかった。美鈴だって引越しや別れを控え、色々思い悩む事があつただろうに。

『仕方ないだろ　名前を呼ばれても　それは俺のことじゃないんだよ』

卒業式の後、荒んだ気持ちで吐き出した言葉に一真が怒つたのも当然だった。

冴珠が目を覚ますと、酷い寝汗をかいていた。少しオレンジ色を含ませた光線に染められた自室の壁や天井。ベッドヘッドの目覚まし時計を見ると、四時過ぎだった。

額に張り付く前髪を掌で払い除ける。シャツも換えたいし、水でもコーヒーでも良いから飲みたい。喉がカラカラに渴いていた。

だが、階下に行くのも面倒だった。とにかく全身が重い。

……シャン……シャンシャン……

冴珠の耳鳴りは、気を抜くと意識に滑り込むようにして存在を知らしめる。今まで気付かなかったただけですつとお前の傍で鳴り響いていたのだというような自然さだから、気味が悪いと思わずに済んでいるのだろうか。

冴珠はその「おと」に耳を傾けてみた。

（何の音だ）

細かく振れる小さな音。耳鳴りは秋の夜を飾る虫の音のようだと思っていたが、鈴の音に近いかもしれない。耳に、いや、身体全体に心地よく染み渡ってゆく。漣のような、うっかりすると聴き漏らし

そんな僅かな音。

耳を澄まし音源を探ると、それはどうやら移動することが出来るらしかった。

可笑しな話だ。音が来る、なんて。

けれど確実に近付いて来ているのだからそう表現するよりない。牙珠はじつと神経を凝らす。僅かな振動も鼓膜に反射させるように。

……どうやら西の方が音源らしい。

音が牙珠のすぐ傍までやって来るのが判る。

聴こえるのだ。

（これ、いわゆる幻聴ってヤツなのか？）

幻聴。世の中の耳鳴りが聞こえるという人は一体どうしているのだろう。気になって生活にならない、なんてことはないのだろうか。

そもそも 他人の幻聴は、これと同じ音なのだろうか。

海の波に誘われてゆくような……心地よい幻聴というのも変な感じだ。

（気持ちイイ）

牙珠は目を閉じて、その音に身を任せた。

音はゆらり……ゆらりと寄せては返す波のリズムを真似ているのだろうか。視界を放棄するとそこは海のただ中のようにも感じられた。

広々とした空間に優しく満ちる漣。

抗う必要は何も無い。

……シャンシャン……しゃん……

鼓膜に届く音色が少しずつ変化する。

音量がゆるやかに上を目指す。

シャワーのコックを徐々に捻った時の、柔らかく降り注ぐ雨のイメージ。

（別にいいさ）

鈴の音が降り注ぐ雨になったところで困ることはない。牙珠にとって、これが幻聴でも構わなかった。

質感を伴う音の水流が牙珠の周囲を満たしてゆく。ゆっくりと音の

中に飲み込まれてゆく。

ゆらりゆらりと巡る大きな流れに、次第に肉体が意味を持たなくなる気がした。深く、深く体は底の無い何処かへ沈み、精神だけがたゆたいながら肉から解放されてゆく。

ここは海の底なのか、宇宙の内なのか。

肉体は無くとも自分という『もの』は存在している。

それは不思議な感覚だった。

自分これはなんだ？

ゆらゆらと不確かな空間に、紛れることなくしつかりと自分がいる。けれどその感覚は広く広く、拡がる世界の内を全て感じている。

宇宙せかいとひとつになる。

しゃんしゃんしゃんしゃん

牙珠は何がなんだか解らなくなってきた。

感覚から得た情報を纏めようとしても言葉が鈴の音に紛れてしまいそうだった。

ここがどこで、自分がどうやってこの世界に存在しているのか。

（鈴が）

次第に大きくなる音。絶える事の無い渦。

…しゃんしゃんしゃん…しゃんしゃん…

音はもう意味を持たない筈の肉体を打ち付ける。どこかへ置き忘れた肉体へ、意識の一部だけが繋がっている。

（雨、だ）

そう思った途端、不意に意識が体と深くリンクした。

牙珠は今大雨に全身を打たれている。その激しい雨が身体に降り注ぐのか、意識へ降り注いでいるのか牙珠には判断できない。

責めるように、急かすように土砂降りの雨が牙珠を揺さぶり続ける。苛む雨は精神の曇りを洗い流して清めてゆく。打ち付ける鈴の音は滝なのか。身体ごと冷水に浸されている錯覚に陥る。

これではまるで楔けがれのようだった。

楔が虚飾を削ぎ落としてゆくものならば。

（この体が…邪魔なのか？）

砂金を水底から見つけ出すために篩にかけるように、いらぬ泥は流してしまえ。

洗い流される泥。

余分なもの。

（俺には…何が残るんだ）

はっと思い浮かぶ言葉。

今、どんな言葉を続けようとしたのだろう。

首筋がぞつとしたが、それが何だと言われても冴珠の思考が追いつかない。

今自分は一体何に怯えた？

（核が　　）

核が無いのに？

（中身を取り出すと　　）

シャラシャラシャラシャラ

シャンシャンシャンシャン

鈴の音が邪魔をする。思考が纏まらない。

冴珠は必死で言葉の糸を手繰り寄せる。

…俺は今、何処にいるんだ？

核が無ければ　どうなる？

（篩にかけても　何も…残らないんじゃないのか）

心地良かった筈の音は、もう冴珠のコントロールできる範囲には無い。

肉体なくして精神が存在できないのが当然…ならば。

全ては錯覚？

（やめてくれ！）

続く言葉を振り払おうと、冴珠は呻く。

ざわめく世界。止まらない宇宙の波。眠りたがらない子供をあやすように、渦巻いて冴珠を呑み込む。

考えたく無い。言葉にしてしまうのは恐い。だがそうやって言葉で

意識を繋いでおかないと、渦巻くものに浚われてどこかに流されそうだった。

それは　もつと恐ろしい事に思われた。

肉体と切り離されてなお、確かに存在していると思った自分の精神。だがそれには何か大切な、「核」とも言うべきものが無いと冴珠はもう知っている。

（どう、なるんだ）

核の無い精神は肉の鎧が外れれば、形を保てずに液体のように流れ出してしまうんじゃないのか。篩に掛けても、何も残らないなら鈴の音が暴いてゆく。見せ付けられる。己は何処にもいない。海の底に沈むことも出来ず、細かな泥の様に網目をすり抜け、濁った流れになって溶けてゆくだけ。

シャラシャラシャラシャラシャラシャラ

では、こうして流れに抗おうとしている『自分』は…

……残ったコレは何？

……飲み込まれて埋もれて……自分は一体どこにいる？

シャラシャラシャラシャラシャラシャラシャラシャラ

奔流は冴珠の思考を暴力的に攪拌させ、言葉で意識を留めようとする冴珠を嘲笑う。そんなものは何の救いにもならない。ただの詭弁だと、力で捻じ伏せようとしている。

冴珠は苦悶の汗を浮かべた。

（ヤバイ……ッ……）

恐ろしい、底抜けの空虚がすぐそこにある。

（喰われる……）

鈴の音はもう何かわからないものに変質していた。ヒステリックな金属質のそれは、滝のように冴珠を真上から打つ。叩きのめしバラバラにしてしまおうとしているのかのように。

（たすけてくれ！）

声が出ない。指一本動かない！

（押し潰される……）

音に殺される……！！

凄まじいまでのプレッシャーが全身に押し掛かる。何かの糸が
プツリと切れた気がした。

核の無い自分。

中身が意味を持たないのならば、己はただの容器じゃないか。

けたたましく嘲笑う魔物。声無き声で歌われる悪意。

イレモノなら幾らでも代わりが利くんだって知っているんだろう？

誰もお前の「核」^{なかり}なんて求めてないよ

求められないガラクタならばぶちまけてしまえ！

（誰かつ！！）

何も無い。

何も残らない！

この恐怖から救い出してくれ！

「ッ！！」

最後の悲鳴すら音にならなかったのかも知れない。

体中で感じられたのはただ痛みすら伴って降り注がれる、『それ』
だけだった。

暗闇に襲われて世界は消滅する。

冴珠はそこで意識を失った。

誰が

（こんな結果を予想するものか）

誰が

（こんなことを望んだというのか）

誰が

誰が 呼んでいる？

懐かしいこえがきこえる

美鈴が反対車線のホームに入って来た電車に乗り込み、窓際で小さく手を振っているのを見送った。一真の乗る電車は四分後に入ってくる。なんとなく駅の柱の近くにのそつと立ったまま、一真は西日に馴染んだ辺りの光景を眺める。

一真にも中学時代付き合った彼女がいたが、彼女に名前を呼ばれた時、それが違う人間の名前だったら、やっぱりどうしようもなくシヨックだ。

（だってさ、二人っきりの時に名前呼ばれて ）

そこで相手がしまった、ごめんとバツの悪そうな顔でもしたらまだ良い。前の彼氏と間違えちゃったでも、許せる（と思う）。最悪二股だって、自分が本命で無かったとしたって、それはそれで次の行動に移せる（と思う。大きなダメージを負った所為で暫く人として使い物にならない気もするけど）。

どんな選択をするにしろ 頑張って本命になろうとアピールするかもしれないし、カナシイ思い出として封印するかもしれないが

それぞれに対処の仕様があるのは間違いない。

こたまま
冴珠の場合は違う。

美鈴は気付かない。美鈴は他の男子には向けられなかった、あの当時のきらきらした笑顔を向けて、冴珠を呼んだんだろう。クラスでは多少人目を気にして、それが控えめになつていたとはいえ、冴珠と一緒にいる時の美鈴は本当に嬉しそうで　可愛かった。

その彼女に呼ばれたのが自分の名前で無く、他人の名前だったら、あの當時を思い出すとありえないシチュエーションに思えるが、冴珠だつて一真がシュミレーションしたような、何かしらの行動をとつた筈だ。

（でも、相手が自分だったら、どうしようもねーじゃん……）

たとえ「自分じゃない」と思つても、世間一般の人にそんな事情、解りはしない。奇跡的に解つて貰えても、じゃあ一体何と呼ばれたいのだと訊かれたら答えられる筈も無い。

結局自分にしか感情を向ける事が出来ない。

（…ありえねーから、冴珠は余計苦しかったんか）

美鈴が呼んでいるのは自分だと判るからこそ、辛かつたのではなかったか。

（……なんだよ、それ）

知らなかった。さっきの美鈴との会話や、名前の違和感の話を聞いていなければ、一真はきつと知らないままだった。冴珠は恋愛に対してどこか冷めた態度をとつていような気がしていたが、本当は違つたのだ。

昔の一真は（今でもあまり変わつていない気がするが）割りと惚れっぽい性質で、いつだって好きな人や気になる子は結構いた。その時は目の前に夢中だし、アピールする時は一筋なのだが　振られても、実らなくてもそれは一つの想い出として、気持ちの整理をしてきた。でも冴珠は小六の時に、既にそんな事が出来ないほど人を好きになる経験をしていたのだろう。

（『冴珠くんって大人っぽいよねー』…か）

当時の女子の台詞を思い出す。

（でもアイツは）

『僕は大人になんかなりたくない……』

一真が冴珠の事を強烈に意識し出したのは、昔ふと彼が漏らした言葉聞いてしまっただけかもしれない。

誰に言うでもなく呟かれた言葉。好き勝手に声を上げてざわめく教室の中で、その声は一真の耳にぼーんと飛び込んできた。一真は反射的に声の方、隣の少年を凝視していた。

なんで、と訳を尋ねようとして一真は口を噤んだ。

一真が思い留まったのは、過去にひとりごとで合いの手を入れられて恥ずかしい思いをした経験があったからだ。だがそれだけではなく、子供なりに興味本位で聞いてはいけないような雰囲気を感じたという部分もあったと思う。

その言葉を聞いたのは、小学校の社会学習が何かの時間だった。確か 将来の夢、将来、どんな仕事をしたいですかという課題だった。どんな仕事があるかを調べ、自分のなりたい職業についてのレポートを発表するという授業で、その日は自分の知っている職業やなりたい職業を書き出し、それについて調べる手段や手順を整理するように指示が出ていた。

「おまえ……」

ちらつと冴珠の手元を見れば、授業の最初に配られた紙は白紙のままだった。冴珠は紙をじつと見詰めたまま鉛筆を持つともしていない。

結局冴珠はその時間中、何も書かずに黙って過ごした。

（来週の発表、どうすんだろ）

何も書かないまま発表に臨むのだろうか。

半分の心配と半分の好奇心で迎えた次週の授業で、冴珠は平然と「喫茶店をしたいです」と言った。そのままきちんと喫茶店のレポートに入り、恙無く彼の発表は終わった。何で喫茶店なのかと後でこっそり訊けば、親戚がやってて楽しそうだったからという応えが素

っ気無く返ってきて、拍子抜けしたのを覚えている。

コーヒーって美味いんだぜとにやつと笑った顔が、大人びた台詞と裏腹で、そのままじゃれ合いになった。

冴珠は当時の一真にとつて、かなり大人びた子供だった。まず第一に一真のように後先考えず、つい馬鹿をやることが無かった。その辺がギャーギャーと評された自分と、大人っぽいと評されていた冴珠との違いだろう。

『僕は大人になんかなりたくない……』

けれど、今あの時と同じ場面に遭遇したとしたら、一真はどう思うだろう。

（あれは大人っぽいんじゃなくて……）

誰よりも大人びた瞳をしている子供。

そう、感じるのではないだろうか。彼は大人になる事を恐れていたのではないだろうか。

その頃の一真は、成長する事を楽しみとしか受け取っていなかった。早く大きくなりたい、中学生になって、高校生になって　と将来の夢を膨らませるのに大忙しだった。特になりたいものがあつた訳ではない。ただ単に子供には認められない『大人の特権』に憧れていたのだ。年の離れた兄には許され自分には許されない事の多さに、歯痒さを感じていたのだ。

それだけに、冴珠の呟きを聞いた瞬間一真は酷く狼狽した。一真は心のどこかで、冴珠に軽い裏切りを受けたようにも感じたが、それは同時に心地の良いものだった。

その一言は一真の中であやふやな存在に過ぎなかった葛冴珠と言う人間を、急速に身近なものにした。

コイツはどうやってなりたくもない大人になるんだろう。

屈折した感情ではある。少し、意地が悪いかもしれない。

初めて覗いた他人の心の内は興味深いものだった。徐々に打ち解けて臆けながら彼の心を掴めるようになり、一真は唐突に悟った。

冴珠は　二人いる。

どちらも間違いなく本人だが、大人の冴珠と子供の冴珠がアンバランスに、互いに混ざろうとしながら存在している。前者は一真にとつて奇妙な、けれど興味をそえられるズレを持ち、後者はそのズレをオブラートに包んだようにして一層不思議な雰囲気^{くも}を放ち、大人になんかなりたくないという。

自分より余程大人っぽいのに子供のままであることを願っている。いや、必死に成長するのを止めようとしているかのような。

電車から降りると何もかもが夕焼けに染められていた。一真は駅の駐輪場へ向かい、荷台に重い鞆^{たもと}を載せる。

家の近くの公園の傍を通り掛った時、一真は無性に切なくなった。昔、ここで冴珠と日が暮れる間際まで遊んだ。あの時の冴珠はどちらの冴珠だったのだろう。

「ただいまー」

一真は玄関でリビングにそう声を掛け、返事を背中中で聞きながら音を立てて階段を駆け上った。超特急で制服から私服に着替え、手洗いとうがいを済ませる。酷く空腹で早く腹に何かを入れたかったが、坂本家では制服のまま飲食は出来ない、というより母が絶対に許さない。

朝食だろうが何だろうが兎に角食べ終えてから、制服に着替える事になっている。食べ汚して制服の真っ白いシャツに染みが着いたり、ズボンを洗濯しなければならぬような事態を避ける為だ。そんな坂本家ルールが出来てしまったのは、決して一真自身の所為ではないと彼は思っている。

多分、母は兄の時に懲りたから、そういうルールを作ったのだ。リビングと一続きになっているダイニングに滑り込むと、先に帰って来ていた弟が、既に夕食前の間食にインスタントの焼きそばを食べていた。がつつきながら目だけをちらっと上げた亮平がもごもごと奇妙な音を出す。一応挨拶の筈だから一真もおーだかうーだかわからない声で返事をした。

「おかえり」

「ただいまー。母さん、オレも！」

「その袋の中に入ってるわ」

台所で夕食を作っていた母親が苦笑し、濡れた手で彼女自身の斜め後ろを指差した。冷蔵庫の横に置かれた見慣れた薄茶のマイバッグの口から、カップ麺が溢れそうになっている。一真も亮平と同じ焼きそばを手に取り、早速包装を破る。電気ポットから湯を注ぐと残りが僅かになった。一真は三分間の待ち遠しい時間を薬缶で水を足しながら紛らわす。見下ろした焼きそばの蓋には宇宙船が描かれていた。

かぐや姫の話をした後の宇宙船。

微妙にタイムリーだと一真は思った。

「そっぴやさ、どうしてかぐや姫って竹の中に入ってたんだっけ？」
三分を壁の掛時計で計りつつ、一真は忙しく動く母親の手元を見た。人参、じゃが芋、玉葱…調理台の上にはカレーのルーのパック。今夜のメニューは自分の予想通りで間違いないだろう。

「何それ」

「竹取物語でさ月から迎えが来たのは知ってるけど、何でわざわざ地球に生まれたんだっけ」

「今更何そんな子供向けの話してんのさ」

ダイニングのテーブルの方から、まだ変声期を迎えていない少し高い声が飛んで来た。

「バーカ、竹取物語は子供向けの話なんかじゃねーよ。立派なコテブンガクだっつーの。お前中一だろ！オレは中一でやったぞ」

「オ、オレはまだ中学に入学したばかりだろ！古典なんてやってねー！！」

二人の会話のバックミュージックは人参がテンポ良く刻まれる音だった。呆れたようにいつもの二人の喧嘩を聞いていた母親が、ふっと思いついたように口を挟んだ。

「罪を犯したから、じゃなかった？」

そろそろ三分だ。

「罪？」

火傷しない様指に気を付けながら、一真は慎重に湯をシンクの端に流す。

「そう」

「何の？」

「それは書いてなかったんじゃないかしら。軽い罪だったとか……？」

「軽い罪で何年も地上に落とされてたわけ？」

「向こうの人にとってはほんの少しの時間の感覚だったと思ったけど」

一真はもう忘れちゃったという母の言葉に生返事をして、湯氣に乗せてホクホクとソースの香りを漂わせる焼きそばを持ってテーブルに移動する。

弟と同じ様に綺麗にカップの中身を平らげ、人心地がついたところでふと思った。

（昔の人は人工衛星とかスペースシャトルから見た地球の映像なんか知らねーもんなあ）

宇宙から見た、果てしない暗闇に浮かぶ地球のはつとする程の青さや美しさなんて見られる筈が無い。ましてや地上からは煌々と輝いて見える月が、灰色の岩石で出来た不毛な土地などと、一体誰が想像し得ただろう。作者未詳の作品だが、もし書いた人がこの事を知っていたら、物語のストーリーは少し変わっていたかもしれない。（あ……でもなあ）

宇宙から見た地球は確かに美しいが、その地上では醜い出来事が沢山起こっているのも事実だった。人間の欲望やそこから生み出される醜さは、時代によってそう大きく変化するものでは無い。求婚者のエピソードの中にもその人間の醜さが描かれている部分がある。そういったものを表現する舞台は、やはり月では駄目なのだろう。欲も穢れも人だからこそ。

天人の様に人の心を持たない者達が住む月では、醜い欲が渦巻くこ

とは有り得ないのだ。

冴珠はバス停のベンチにぐったりと身を預けていた。こたま

横から差す朝日が閉じた瞼を通り越し、暗い視界に白っぽい斑点を映している。

先週の金曜に早退したが、少しの頭痛と体の重さがある以外はなんとも無かった。ただ家族には回復し切らない体調を心配されたらしく、今朝は母がバス停まで車で送ってくれた。いつもは自転車です五分程掛けて駅まで通うが、バスなら五分で駅に着く。この時刻だと、余裕でいつもの一本前の電車に乗れる。

冴珠はそう計算していたのだが。

バス停で駅に向かう路線のバスを待っていたら、先に到着した違う路線バスの排気ガスに胃がせり上がって来るような吐き気を催してしまった。

（こんなことなら、いつそ駅まで送ってもらえば良かったかも…）
最初母は駅まで送ってくれると言っていたのだ。

今更ながら申し出を断ったのを後悔したが仕方が無い。まさか排気ガスを吸い込んだくらいで、動けなくなるほど気分が悪くなるとは思わなかった。

目の前に見慣れた制服を着た人々やスーツを着た通勤者の列がどんどんと連りだしている。冴珠は白くなりかけた木のベンチに投げ出した左腕の時計を確認した。もう直ぐ駅に向かうバスが来る時間になるが、この状態では乗れそうも無い。間違いなく環境汚染する。

半ば諦めて冴珠は再び目を閉じ、じっと回復を待っていると、ふいに肌に朝日を感じなくなった。影が落ち、閉じた視界にあった白い斑点もすつと赤黒く色を変える。

「乗らないの？」

どこかで聴いたような澄んだ声に、億劫に思いつつ冴珠は目を開いた。光を遮った声の主を見上げる。

「……あ

見覚えのある子供だった。その子供の後ろに向かってくるバスの姿が見える。

（あーあ）

まだ、動けない。頭がくらくらする。十分後のバスが、遅刻するかどうかのデッドラインだ。冴珠はゆっくりと停止したバスが並んでいた人々を呑み込んで、再び動き出すのを黙って見送った。

バスが去ると、急に風通しが良くなった。目の前に広がる歩道、太い車道、向かいの商店街まで、辺りは朝日を浴びて明るかった。訪れた控えめな静寂に、人が居る故の雑多な音が随分多かったのだと気付かされる。

「行っちゃったね」

バスの走り去った方を眺めていた子供は、そう呟いた。声を掛けてきたのは早退した日に電車で隣に座っていた子だ。朝日を後ろから浴びた色素の薄い短い髪が金色に見える。先日と同じように子供は隣に腰を下ろすと、肩に担いだリュックを無造作に体の脇に置いて、冴珠を見上げて来た。

「気分悪いの？」

「……ちよつとね」

「これあげる」

少し考えるような顔をしてから、ハーフパンツのポケットからごそごそと差し出されたのは、姉が好きな銘柄のビタミンCが豊富と謳われているのだ餡だった。躊躇いがちに冴珠が受け取ると、美味しいよ、と言って子供はもう一つ同じ餡を取り出した。黄色い包装をパリッと破り、薄い半透明の黄色の粒をぽいっと口に入れてコロコロと転がしている。冴珠もパッケージを破って、餡を口に放り込んだ。

含んだ途端に広がるレモンの香りに、気分がすっとした。

そういえば朝はコーヒーと水しか飲んでいない。空腹感はないが、その所為で気分が悪くなつたのだろうか。だったら間抜けだなと冴珠は思った。

隣に座った子供は通り過ぎる人々を眺めている。その間に幾つかのバスが来たが立ち上がる気配は無い。同じ方面のバスを待っているのだろうか。

「学校は駅の近くなのか？」

「今家出中なんだ」

につこりと笑う様子に、冴珠はまじまじとその子（格好から判断すると男の子らしい）を見詰めた。確かにこの子は先日、冴珠が下りた駅よりも先へ向かつていた。このバス停の最寄りの電車の駅は先日冴珠が下車した駅だから、こんな所で会うのは妙だ。

（でもあの時はどこかへ行っていただけで…その途中だったかもしれない）

よくよく見れば、赤いトレーナーに黒のハーフパンツという姿は同じ気がする。だがあくまでその程度しか服装の印象は無いし、十分洗濯する時間があつた筈だ。脇には子供の体格の割に大きなリュックもあつたが、鞆は自由という学校もある。これだけでは冗談かどうか判断できなかった。

「家出つて…夜はどうしたんだ」

「結構なんとでもなってるよ。ここ三日程は冷え込まなかったから本当に家出だろうか。歳は一桁にしか見えないのに、家出をして数日間野宿までやってのけた？あまりにも軽く言われ、冴珠は俄かに信じがたい。

「家の人が心配してるんじゃないのか」

「んー？親は大丈夫だと思う。でも穂鳥はパニックになってるかも」
「ほとり？」

「穂鳥は、一緒に住んでる同い年の親戚の子」

「とにかく連絡してあげたら？…親も大丈夫な筈無いだろ。携帯無いなら、貸すから」

「持つてる」

「ごそつと右のポケットから取り出された子供用の携帯を見せられた。ぼん、と冴珠の掌に載せられた青い携帯は電源が入っていない。電池切れかと思ったが、態と切つてあると言われ驚くよりも呆れてしまった。」

「だつて電源入れてたら、心配した穂鳥からひっきりなしに電話やメールが入つて来るの、わかつてるもん」

「それは当然なんじゃないのか」

「こんな子供が突然家出して音信不通になつたらとんでもなく心配するに決まつている。」

「穂鳥が心配性過ぎるだけだつて。そりゃ…もうそろそろ帰るつもりだけだ」

「このバス停からなら、十番台のバスに乗れば全部駅に着くから」
「冴珠がそう言つと、子供は暫くしてから頷いた。」

「……一回連絡入れて安心させてあげたら」

「穂鳥に？」

「仲、良いんじゃないの」

「良いつていうかさ、と子供は唇を尖らせ、地面に着かない脚を前後に大きく揺らした。」

「穂鳥と僕は…二人でひとつ、なんだよ。僕は…千鳥つて言うんだけど、偶々二人とも『鳥』つて同じ字を使つてあるのつて凄い偶然だと思わない？」

「特別な秘密を教えるように、少年　千鳥がそう話すから、冴珠は少し目を細めた。」

「……そうだな」

「冴珠の相槌に千鳥は可笑しそうに笑つた。」

「本当はね、偶然なんかじゃないんだ。お母さんと穂鳥のお母さんがイトコ同士で、僕に千鳥つて付けるからお揃いにしようつて、穂鳥になつたんだつて。二人合わせて『水辺の鳥』。二人でひとつ、だつて」

（それは、偶然じゃない）

彼らの親には何らかのインスピレーションが働いたのだ。それはもう絶対に偶然ではないと何故か冴珠は強く思った。鳥を揃えるという発想や語呂合わせの様な名前を選んだのは、一見すると偶然だ。だが他にもミドリとかコトリとか：選択肢は有っただろう。彼らにとつて『千鳥』と『穂鳥』という名は、きっと『相応しい』名前なのだ。

「そんなに仲が良いなら尚更：だろ」

二人でひとつ、なんて言えてしまう程仲が良いなら。

「面倒臭いなあ」

「……電源入れるよ」

冴珠が手渡された携帯の電源を入れた途端、それは鳴り出す。不在、メール、留守電と次々と画面に表示が増えて、着信が入った。穂鳥と表示されている。冴珠は無言で携帯を渡した。受け取った千鳥が通話ボタンを細い指で押した途端。

『千鳥ちゃん！！』

（…可哀想に）

聴こえてきた甲高い声は、完全に泣き声だ。

「あーはいはい。わかって…あー？親は大丈夫だっただろ」

スピーカーから漏れる今どこにいるの、何やってんの、心配したんだからと言いながらわんわん泣く必死な声に、冴珠は思わず呟いてしまった。

「あんまり心配掛けるなよ…」

ちらつと冴珠を見た千鳥がちよつと照れたように笑ってユックを担いで立ち上がり、バス停から少し離れた。喧嘩でもしていたのだろうか。さっきはあんなに電話の電源を入れたがらなかった千鳥の顔には、穂鳥の声を聴いて笑みが浮かんでいる。

バスが来た。気付けば冴珠の気分の悪さはすっかり回復していた。

冴珠は立ち上がる。振り向くと、携帯で話しながら冴珠を見た千鳥が笑顔で、小さな手を振っていた。

世界が、酷く揺らいでいる

ここはどこだろう

何故こんなところにいるのだろう

不意に訪れた静寂

我に返った者は辺りを見回し

そして全てを思い出す

冴珠がバスに乗り込むと後部座席近くの一人掛けの椅子に座れた。
一本前のバスは混んでいたのに、十分の差で随分と人口密度が変わる。駅までは五分という短い時間だが、この体調で座れるのは有難かった。ギリギリだが走ればいつもの電車に乗れるだろう。

朝日を溢れさせる窓の傍は随分と暖かい。腰を下ろしほっとした冴珠は、先ほどの千鳥という名の少年を思い出す。

（聞きそびれたな）

先日、電車のガラス越しに何かを言われた気がしたが、それも気のせいだったのかもしれない。記憶を辿っても、ここ数日のものはどこか曖昧な感触だった。

（二人でひとつ、か……）

足りないものを補うというならば、互いに補完し合うという方法もある。

（足りない事が前提なんだ）

大切な秘密を打ち明けるような千鳥の顔。穂鳥の必死な声。相応し

い名前を付けられた子供達。通話中で同じバスには乗らなかったが、あの子はきつと次の便で駅に向かうのだろう。

ビルに一瞬遮られた陽射しを無意識に追い求め、冴珠はふつと窓に目を遣った。そこに映った自分の顔を見て、冴珠は目を見張る。

（…嘘、だろ）

泣いている。頬を次から次へと涙が伝っている。慌てて顔を伏せ手の甲でそれを拭ったが、込み上げるものは止まりそうにない。

（なんで…）

冴珠には何故自分が泣いているのか解らない。

苦しい？

悲しい？

思い浮かんだありふれた言葉はどれも違う。冴珠は瞼に力を籠めた。ぐつと堪えれば堪えるほど、身体の奥底からせり上がって来る何か叫び出しそうだった。居ても立ってもいらなくなりそうなの解らない衝動に突き動かされそうになる。

「…ッ」

自分を押さえ込むように、狭い座席の狭間で固く身をかめた。制服の両の二の腕にきつく爪を立てる。布に食い込む爪が齧す痛みより、胸の内が膨張するような、血腥い熱が気持ち悪い。

駅の改札を定期で突っ切り、冴珠は手洗へ駆け込んだ。天井をびりびりと揺する電車の轟音に紛れて何度も胃液を嘔吐した。冷や汗と涙と唾液が顎を伝い、ねっとり絡まりながら水流の中に落ちてゆく。

冴珠は大きく肩で息をしながらふらふらと個室を出た。吐き気は何とか治まった。元々殆ど胃に入っていないから吐き出せるものは限られている。冴珠は蛇口から出る水に焼けた喉と口腔を晒した。

目の奥から響く頭痛に抗うように、冴珠は顔を上げた。白々とした蛍光灯が照らす鏡に映った顔は蒼白だった。

一限目が終わる間際、一真は昇降口に見慣れた人影を見つけた。
(遅刻かよ……って、何か変じゃね？)

四階からでも何時もの雰囲気と違うのが見て取れた。何かを庇うような姿勢に、チャームを待って一真は一階に降りる。

「遅刻じゃん」

軽い調子で声を掛けた相手は靴を履き替えた所だった。

「冴珠、大丈夫なんか？」

見下ろした顔は白いを通り越して土気色だ。よくこれで動けたなと呆れる。冴珠はそのまま話しかける一真の横を素通りしそうになった。いくら具合が悪いとしてあんまりだ。

「冴珠！」

「……？」

何かが一真の勘に引つ掛かったが、言葉にする前に二階の職員室から降りて来た冴珠の担任の野太い声が響く。

「葛、大丈夫か。駅員さんから電話有ったぞ」

「……」

「電話？」

「駅で具合が悪くなったらしくてな。それにしても酷い顔色だぞ」
冴珠の顔を覗き込んだ教師は眉を顰めた。

「折角頑張ってきたのにあれだけど、今日はもう帰れ。家に連絡入れとくから 坂本、保健室付いてってやれ」

辿り着いた保健室には運良く保健医が居た。一目冴珠を見た彼女は手際良くベッドを用意し、冴珠に体温計を渡して横たわるよう指示する。

一真は邪魔にならぬよう気遣いながらベッドを見下ろした。

「……休めば良かったのに」

「うるさい……」

「いつもなら無理して来ねえだろ。今日は特に大きな行事も無えし」

「…どうしても来ないといけないような気がしたんだよ……」

冴珠はそう呟いたきり、そのままぐったりと動かなくなった。一真は溜息を吐いて仕切りから出て壁際のベンチシートに腰掛ける。

「葛くんは金曜から体調悪かったね」

「はあ。早退してます」

恐らく、土曜の補習にも出ていなかったと思う。一真は冴珠の姿を見ていなかった。

「頭痛と微熱で微妙だったんだけど帰したの。耳鳴りもあるって言うていたから病院に行くように勧めたんだけど」

「はあ…」

一真は手持ち無沙汰に壁を眺めた。健康関連ポスター数枚に日捲りカレンダー。それに依ると、今日は四月二六日の月曜日だ。一真はこの手のカレンダーがエコロジーやエコノミーの点から考えると、良いものだとは思っていないが、作つたからには使つた方がマシ。日付や曜日に加え占い（大安とか仏滅とかいうあれ）や格言めいた今日の一言、広告が小さな白紙に埋め込まれている。その中に、向かつて左の上部が欠けた少し歪な楕円が描かれていて、目を凝らすと『十三夜』と見慣れない単語が書いてあった。

「早退してしっかり治してらっしゃい。それから病院にも一度行くこと」

チャイムが鳴り響く。

カーテンで遮られた友を幾度か振り返りながら、一真は教室に戻った。

一真はこの一週間、ずっと居心地の悪さを感じている。それは最初小指の先ほどの大きさしかなかったのに、時間が経つにつれて不安に変質し、肥大し続けている。それが止まる気配は 無い。

一昨日早退した冴珠は、昨日ついに欠席した。

何か、変だ。

特にあの下駄箱の冴珠は絶対におかしい。

あれは人違いで名前を呼ばれた時と同じじゃないのか。「誰だそれは」とでも言いたげな表情だった気がして仕方ない。

そんな筈があるかと思う一方、一真の直感を後押しするように胸の奥が嫌な音を立てている。無理な圧力に歯車が軋むイメージだ。もう数日すれば、何時ものように戻っているに違いない。

一真は気休めのように、思考の合間にそう繰り返した。幾度も常識とざわめきの間で揺れ、結局昨日の夜遅くに大丈夫かと一通だけメールを入れた。

何の返事も無いまま、明日は『昭和の日』で、このままだと明後日まで顔を合わすことはなさそうだった。

（どうなっただよ）

確かに冴珠は奇妙なズレを感じさせることはあった。成長を嫌がった冴珠は、その癖誰よりも大人びていた。大人と子供がアンバランスに混在していて、それが彼独特の掴み所の無い不思議な雰囲気を生み出していた。

だが 付き合いの長い一真でさえも、ここまで不可解な彼は初めてだ。

冴珠が、酷く遠い存在になった気がする。ふと肩を叩こうとしたら、腕が空を切ったというような感触だ。今まで普通に届いていたのに、見知らぬ距離が出来ている。

春に溶け込む、悲しい姿。

何かに焦がれ祈るような気配。

冴珠と距離を感じるのは、何も今回が初めてではない。あの息詰るような姿を目の当たりにすると、一真は掛ける言葉を見失ってしまった。それは普段意識することの無い壁を感じさせられるからだ。もやもやとした分厚いものか、張り詰めた薄い皮膜かも判然としない壁だが、それは明らかに冴珠と一真を隔てている。きっと一真だけでなく、冴珠以外の他者は皆壁の外だ。

世界は彼一人を壁の内に取り込んでいる。

記憶に残るあの光景は『相応しい名前』を切望する姿だったのだらう。

だが今回は、いつもと違う気がする。違う、というより程度の問題なのかもしれないが…。

（でもさ…本当は）

本当は　ひとつ、一真は冴珠に内緒にしている事がある。世界を隔てる壁の正体。

それは、壁の向こうとこちらを隔てる、『存在の差』だった。

冴珠と他の人間との差異を生み出す『何か』は、あの『竹取物語』を学習した時に一真の中ではつきりとした言葉になった。

冴珠は　どこか遠い世界の人間なのだ。

壁は大抵忘れた頃に現れた。一真はその度に、戸惑いながらも何か『絶対的な違い』がそこに在るのを本能的に認めていたと思う。何が原因なのかは判らない。けれど　多分、何かが根本的に『違う』と感じていたのだ。

言葉で冴珠との壁の感覚を言い現せた時、一真は深く落ち込んだ。何やってんだと、自分を罵った。

彼は異なるルールの世界の住人なのだ、とそんな言葉で冴珠を括り付けて何になる。非生産的で、無意味だ。

その一方、薄情なのか冷静なのか紙一重の結論を心中に棲む一真は「正しい」と主張している。認めたくないが出した答えは完璧に思えて、簡単には消せなくなった。

それが、自然だ。

正しい姿なんだ。

月の使者に連れられ帰っていった伝説の人のように、いつか目の前から消えてしまっても、自分はそれを当然のこととして受け入れてしまうのだ。拒絶は　不可能だ。

（冴珠はいつか、いなくなるんじゃないのか）

一真は漠然と　そんな予感を抱いている。

だから冴珠の様子がおかしい事が、気になって仕方ないのだろうか。ざわめきの正体は去り往くものを予感した故の焦燥感だろうか。

（アホらし！）

ぶちつと自分の思考を断ち切り、一真はシャーペンを投げた。さつきから同じ問題に掛かりきりで一向に先に進まない。情けない話、何度解いても答えが合わない。

（絶対にアイツのせいだ。問題文の意味すら頭に入って来ないなんてありえねー！）

「あークソッ！！何やってんだ俺は！」

一真はがしと髪を掻き回し机に突っ伏す。目の前の時計の針は午後七時半を少し回った所を指している。もうそろそろ夕飯だ。腹が空き過ぎて馬鹿な事を考えてしまうに違いない。

気晴らしのつもりで、部屋の電気を消してカーテンを勢い良く開け放った。

何気なく見渡した紺地の空に、一真の心臓がどきッと跳ねる。

「おいおい……」

東の地平すれすれに大きく歪んだ赤い月が浮かんでいる。

（な……んだアレ）

十三夜、という単語が脳裏を掠める。あれが月曜の事だから……今日は十五夜。

ぞくりと背筋に悪寒が走った。

（　　アイツ、今どこだ）

一真はその時、何故か酷い胸騒ぎに襲われた。

咄嗟に携帯を手に取っていた。一真の指先が履歴を呼び出す間にもボデイが温くなる。握り直した拍子に掌が汗ばんでいるのに気付く。
（早く出るッ……！！）

十五夜。

歪んだ赤い月。

冴珠は今どこにいる？胸騒ぎは何の予兆だ。

無性に存在を確かめたかった。

何も無いならそれで良い。笑って誤魔化してやる。とにかく繋がりさえすれば。

「…はい」

「！オレだけど」

不明瞭なノイズの中に冴珠の声。

何か、妙に何か、掠れていた。

（一応病人だっけか？）

「……何の用？」

「いや…あのさ」

「悪いけど、急ぎじゃないなら今度にしてくれ。頭が痛いんだ」

「ワリイな。おまえ今どこだよ。変な雑音入ってんぞ」

「家だよ。電波状況が悪いんじゃないのか」

暗にお前こそどこにいるんだと言いたそうな口調に、チツと一真は舌打ちした。

（こっちは三本立ってんだよ！！）

赤黒い月明かりが部屋を浮き上がらせる。ここはどこだ。俺は今どこにいるんだ？

（良く見る）

お気に入りのバンドのポスター。昔っつき油性ペンで汚した壁紙も、亮平と喧嘩して付いた傷もそのまま。電波が悪いなんてあり得

ない。ここはオレの部屋でおかしな部分は何一つ無い。

「今から行くからな」

思わず口から漏れた言葉だった。

「は？何いきなり……」

冴珠は訳がわからないといったような、呆れたような声を出した。

「何が何でも今から行くって言うてんだよ！馬鹿野郎！！」

理解不能な苛立ちにまかせて携帯に怒鳴り、一真は一方的に通話を切った。

「一真！もうご飯よ」

「ちよいコンビ二行つて来る！先食つといて！！」

靴を履く間ももどかしく、一真は家の敷地を飛び出した。

恐いもの見たさで振り向いた東の空に、押し潰されて異様な迫力の球体。

（落ち着けよ！）

目の錯覚で大きく見えるだけだ。ついでに地平近くだと上に昇った時に較べ距離が増して、波長の長い赤しか届かないから、紅く見えるだけだ。どれもこれも月を太陽に置き換えれば見慣れた現象だ。夕焼けや朝焼けなら歪んでようが赤かろうが何の疑問も無い。

何もおかしくない。小学生時代に夏休みの自由研究でやったから、間違い無い。

細部まで覚えておらずとも、科学で説明出来る現象だと分かっているだけで一真には十分だ。

（大体こういう理屈捏ねんのが得意なのはオレじゃねーんだよ）

心の中で毒吐きながら、一真は街灯の点いた路地を駆け出した。

この道はお互いにもう何度も通った道だ。この角を折れた数軒先に冴珠の家はある。視界に街灯に照らされた見慣れた塀や門が入った途端、ほっと肩の力が抜けて一真は少し速度を落とした。

見上げた部屋は灯も点いていない。カーテンは……開いているようだ。チャイムを押す携帯を鳴らすかを今更ながら迷っていると、突然玄関が開き冴珠の母親が現れた。手には回覧板を持っている。

「あら、一真くん？」

声を掛けるよりも早く、冴珠の母は一真の姿に気付いてくれた。

「こ、こんばんわー。あ…冴珠くん居ますか」

「おかしいわね、行き違っちゃったのかしら」

「え？」

「今出たんだけど…途中で会わなかった？あの子、約束をしてたって…一真くんじゃなかったのかしら」

「や、オレですー!!」

一真は即答した。

「多分オレ、途中でコンビニに寄ったから、そこで擦れ違ったんだと思います。すみません、病み上がりなのに」

嘘だった。ここまでどこにも寄っていない。

「寝っぱなしで退屈してたのはあの子の方よ。こっちこそ悪いわね。遠回りして羽伸ばしてるんじゃないかしら」

「戻ってみます。多分、いつもの公園にいますと思うんで。どんな格好ですか」

「確か…グレーの長袖のＴシャツだったと思うわ。あの子ったら上着も着ないで出てっちゃったのよ」

一真は元来た道を途中で折れて件の公園へ向かった。そこは昔良く遊んだ住宅地の中の小さな児童公園だ。遊具はブランコと鉄棒と滑り台と鉄棒だけで、後は一瞬でドッチボール、サッカー、野球といったゲームのグラウンドに早変わりする土の広場が広がっている。縁取りのように点いたライトが木々に囲まれた空間を所々照らしていた。一真がこの常連だった頃と殆ど変わっていない筈の空間は、日が落ちると途端に見知らぬ顔に変わり、随分と素っ気無い気配がした。

誰もいない。

それは一真がある程度予想していた事だった。

冴珠の母親は「会う約束」の相手に一真を想像したらしかったが、先刻の一真の一方的な電話は、その「約束」では無いだろう。

一真は公園を突っ切り、大通りに通じる並木道に向かおうとした。殆ど散り終わる寸前の桜。花弁が緑を帯び始めた土の路肩に積もっている。足元の黒いアスファルトには落ちたばかりの白いものから踏み躪られて褪せたものまで好き好きに散りばめられていた。両脇に立ち並ぶ樹木の陰が、暗がりとその世界とをぼんやりと区切る。公園の出口に差し掛かった所で、一真は既に葉を茂らせつつある桜と水銀灯が作り出した薄闇の少し先に、人影を見つけた。

（子供：？こんな時間に何やってんだ）

一真に背を向ける格好で道の真ん中に立っていたのは、白いパーカーを羽織った少年だった。上着の白が辺りの少ない光を反射して目立っている。この子に冴珠らしい人がここを通らなかったか尋ねようか。時間的に冴珠が家を出たのと自分が追いかけたのとに大した差は無い。見掛けている可能性はある。宛ての無いまま公園に来てしまったが、何か手掛かりがあるかもしれない。

そう一真が判断し、声を掛けようとした所で、その少年は足音に気付いたらしく振り向いた。利発そうな一対の瞳。一真はその少年の雰囲気、どこかで見知っているものだと思った。

「ちよつと訊くけどさ、この辺でグレーのシャツ着た高校生位の男、見なかった？身長はこの辺で」

一真は手で自分の顎より少し上を示す。少し首を傾げた小さな子供は澄んだ声で言った。

「さっきの人かな」

「サンキュ」

同一人物かどうかは判らないが、可能性は高い。

「…おい」

子供の脇を足早にすり抜けようとした一真から、低い声が漏れた。腰辺りまでしか身長が無いその子供がシャツの裾を掴んでいる。一真はしゃがみ込み苛立ちが面に出ないよう意識しながら、告げた。

「今遊んでやれねーんだよ」

「バス停ってどっちですか？」

困惑する一真を見て、子供の夜目にも茶色い瞳が少し笑った。

「迷子って言ったら、お兄ちゃん、バス停まで送ってくれる？」

「迷子？」

少し俯き加減の口元が内容とアンバランスに笑みを浮かべている。

一真はむつと顔を顰めた。

「…ケーサツ一緒に連れてってやる。交番か」

「そこまで行けたら、帰り道はわかるんだ」

「つーかまず親に連絡しろよ。携帯ねーの？」

「内緒だよ。迷子になったなんてばれたら、暫く遊びに出られなくなりそうだし。八時までに駅に着いてたら間に合うんだけど」

「ワリイけど、急ぐんだよ。この道真っ直ぐ行って、郵便局の角で右に折れたらすぐ大通りに突き当たる。そこを右に行ったらバス停有るから、十番台のヤツに乗れ」

普段の一真ならバス停まで送ってやった筈だ。だが今回だけは勘弁して欲しかった。こうしている内にも冴珠を見失ってしまうかもしれない。今ならそれ程離れていない。大急ぎで探せば見つかるかもしれないのに。

一人きりで迷子になっても、一真のようにデカイ男に物怖じしないならひとりで行かせても大丈夫だろう。最近変質者が出た噂も聞かない。そもそもこの落ち着き方は本当に迷子か怪しくないか。心の中で幾つかの声が湧き上がり方向が決まる。一真は駆け出そうとした。

が、振り向いた先、少年が薄闇に取り残されるのを見てしまうと駄目だった。

（クソっ）

「一緒に行つてやるよ」

取って返し、急げと小さな手を引き、一真はずんずん歩き出した。

少年は驚いたようだが泣き出さず、一真はほっとした。

「何で急いでるの」

「人探してんだよ」

「友達？」

「そう」

「どうして探してるの」

「とりあえず一発殴るため。約束破られたら腹立たねえ？」

少年が約束してたの、と弾む体に合わせ呟いた。一真は一方的にな、と前を見たまま応える。

「それに何か変なんだよ、今。普段と違う」

風が街路を吹き抜け、辺りの葉桜がざわざわと音をたてる。その度に淡い光が変幻する影を生む。目には見えぬ独特の香りの濃淡。やがて郵便局の橙色の看板が見えて来た。

「無理してる感じがする。おまえ仲の良い友達いつか？」

「おまえじゃなくて千鳥。いるよ」

「そいつがある日突然別人みたいになっただろうだ？」

引き摺られて駆け足になりながら、千鳥は器用に首を傾げた。

「通じなくなるっつーか。目の前で急にドア閉められるみたいな。

ムカツとこねえ？」

言っていて一真は自分が随分苛立っていた事に気付かされた。千鳥にも思い当たる節があるのか、嫌そうな表情をしている。

「…その友達という楽しい？」

「……多分そういうのは年齢関係ねーよ」

視界が開けた。大通りは人工の光に満ち人の顔も十分判別できる。低空の月はきつとまだ紅く歪んだままだろう。一真は足を止めずに搜索の視線を辺りに投げながらバス停に向かう。振り向いてはいけない気がした。その内背の低い千鳥にもバス停が見えた様で、千鳥は掌を解いた。

「送ってくれてありがとう。お礼に」

「いいよ、んなもん」

千鳥がにこりと笑って通りの向かい側を指差す。つられて一真は首を捻る。行き交う車両や人々の中に紛れて見慣れた姿が 足早に先の角を折れた。

「チャンスだよ。じゃあね」

千鳥は折り良くやって来たバスに駆け寄り、ふわりと飛び乗った。バスの車体が低い唸り声を上げて戦慄く。

一真が再び振り向くと、もうそこに千鳥を乗せたバスの姿は無かった。

終章 1

水の膜が張られたような薄闇に、僅かに赤味を浮かばせた黄金の月が出ていた。満ちた月はじつとりと滲み、その光彩で夜空を浸している。

その光を受け背を丸め蹲る獣の姿のよう、樹を生い茂らせている小さな山。麓の色の剥げかけた鳥居が夜の色に紛れながらも薄く浮かび上がる。その先、うねりながら続く不揃いな灰色の石段は中程から木々の影と闇に吞まれ、天辺の小さな鳥居の元に続いている。暗い森に守られたそこは、流れてゆく時代に逆らってすらいるようだ。聖域。

人はその場所をそう呼ぶ。

空の月影は禍々しさを潜ませ、ぼんやりと光る淵が虹色の輪を幾重にも描く。

月の光を反射する石畳に影が伸びた。

山の低い頂に月。そこへ、ほのかに白く伸びる階。

少年は鳥居の少し手前で立ち止まり安堵したような笑みを浮かべた。懐かしい我が家に向かうような、棲み慣れた場所に帰るような。

彼は足を踏み出した。

その足取りに迷いは無い。

月に還りゆく物語の使者達のように。

やっと。

わたしはやっと還ることができるのだ。

自分と呼ぶ声がする。あの人の許に　わたしはあなたに還る。

もう一度わたしの名を呼んで下さい。わたしを私たらしめているのはあなたの存在だけだ。わたしに命を与えてくれるのは、あなたの息吹だけ。

わたしはあなたに還る。

だから今すぐあなたの声でわたしを呼んで。

『それでいいの?』

誰かの声。遠い記憶の奥底から、心揺さぶるように問い掛けるのは誰だろう。

『お前はそれでいいの?』

幾重の問いかけも、やがては反響しながら消えてゆく。

残ったものはただ、空漠としたこの世界。

さみしい。

渦巻く孤独は混沌と混ざり合って誰のものかも判別できない。

ここは淋しい。

ここにも満たされることは無い。

唯それだけは確かな事実。

迷うことは何もない。

かえりたい

はやく、あの場所へかえりたい

大通りから逸れると途端に灯の数^{あかり}が減る。点在する街灯と店から漏れる灯、そしてあの少し暗い月光が一真の視力を支えている。

あれは牙珠あつても、自分の知る牙珠ではないのかもしれない。

一真は牙珠(だと思われる)を追いながら、ちらつとそう考えた。

向かいの歩道を指さした千鳥。見間違える距離でも無いし、見間違えたとも思わない。千鳥が一真の前に擦れ違ったのは、やはり牙珠だったという事なのだろうが…本当にあの人影が牙珠なのか、確証は無い。試しに携帯を掛けてみたが電波が通じないと拒絶する女性の声が空しく繰り返されるだけだった。

千鳥は不思議な印象の子供だった。

「なんでオレの前に通りがかったヤツに声掛けなかったんだよ。急いでたんだろ」

「掛けたけど、聞こえてなかったみたいだよ」

おまえ本当に迷子か、と公園から伸びる街路樹の下を半ば駆け足で通り過ぎながら一真は問うた。

「帰る所はわかってるのに、帰るみちが見つからないのは迷子じゃないの」

千鳥は真っ直ぐな視線で一真を低い位置から見上げてくる。

「紛う事なき、迷子でしょ」

その時にわかった。

初対面なのに見知っていたような気になったのは、妙に大人びた言い回しをしても違和感の無い雰囲気が友人にそっくりだったからだ。横断歩道の青信号を待つ間に少し距離が広がってしまったが、見慣れた後姿は頼りない街灯でもすぐに判った。冴珠の足取りはしつかりとしている。

（オレ、大丈夫か？）

一真は普段なら絶対にしない馬鹿げた行動を取っている。

人違いだったら骨折り損だ。本当に唯の散歩なら、それを後ろから切迫感すら伴って追いかけている自分は、ちよつと危ない人に思われても文句は言えない。

一真にしては珍しく幾つもの自虐的で否定的な言葉を思い浮かべ

それでも足を止めなかった。

今冴珠を捕まえられなければ 自分の知る冴珠ではなくなってしまう。

この馬鹿げた予感をどうしても振り払えなかったからだ。

誰よりも大人びた幼馴染。

大人になんかなりたくないと言った子供。

以前から一真は二人の『冴珠』の気配を感じていた。

だが今、冴珠を追いかける理由は彼の奇妙なズレや、壁によって突

き付けられる『存在の差』による別離の予感では無い。

（あれはアイツじゃない）

今の牙珠は慣れ親しんだ二人の内のどちらでもない気がした。今の牙珠はは 迷路の中で偽りの出口を見つけた迷子だ。

相応しい名を欲した牙珠。自分を擦り抜ける名を受け止められずに孤独は募る。それはきつと存在そのものを根底から脅かす威力を持つている。迷宮に迷い込んだ子供は漸く辿り着いた出口に縋りつくだろう。寂寥と微かな希望で目前の扉を無条件で開けてしまう。それがたとえ牙珠が求める『本物』の扉ではなかったとしてもだ。

（おまえ、どんな扉を開けたんだよ）

常に無い切迫した様子をみせたり、丸きり一真に気付かなかったり。意思疎通が困難になって、しまいには一真が今から行くと云ったのに約束をすっぱかして外出。

（普段じゃありえねえだろ）

あれは一真の知る牙珠では無い。

一真はそう信じたい。

既に直観では確信している。ただそれがあまりにも根拠の無いものだったために、一真は慣れない言葉遊びで自らの正当性を保証させようとしているのだ。

一真には今、牙珠がどこを目指しているのかなど皆目わからない。ただここで見失えば、牙珠は二度と成長しない子供の姿のまま消える。共に居た牙珠は現実世界において消滅したも同然だ。

そして 当の牙珠は未だそれを望んでいない。

一真はそう思っている。

人は傲慢な錯覚と嘲笑うだろうか。だが一体誰が彼の心の内を理解しているのだろうか。きつと誰にもわからない。ならば自分の声に従うべきだ。一真はそう言い聞かせる。こんな冗談のような別れ方は嫌だ。牙珠が己で考え、選択した道を歩むのを見てはいない。

（オレの答えはこれでいいんだ）

まだ、彼といたい。馬鹿な話題で騒いで、時々思い出したように腹を割って話をしたい。

どんな風に冴珠が恐れていた大人への道を歩み続けるのか。どんな生き方を選択するのか見ていたい。ひとりの人間として、あの不思議な友人がどう生きるのか。その彼の人生の中で、出来るなら掛け替えの無い友人として繋がっていたい。

冴珠を、失いたくない。

足早に歩いていった冴珠が、終に駆け出す。その何かを振り切るような後姿に一真は腹を括った。

どこへ行こうが、関係無い。

迷ってなるものか。

（絶対こっちに戻らせるぞ、オレは！！）

そのまま進むのか、途中で方向転換するのか。それは未来のみが知っている。

点々と暗い歩道に落ちる灯は冴珠をどこへ誘おうというのか。駆け出した人影に迷いは無かった。ジョギングなどという可愛いものでなく、全力疾走だ。一真はまさか高校生にもなつて真剣に追いかけてこする羽目になるとは思わなかった。久々に走った所為で息が切れ、目の横が脈打っている。高校受験で落ちた体力を一真はまざまざと実感させられた。

（こんなことならさっさとバスケット部でも入るときゃ良かった！）

行き先が判れば待ち伏せする手もあるが、この状況では素直に後を追うか捕まえるしかない。

進路は大まかに見て南東だが、この辺りの地理感覚が一真には無い。冴珠を追う内、その行く手に見慣れない暗色の塊が平坦な大地の中から盛り上がっているのに気付いた。校舎程の高さだ。森の様な塊の背景の低空は地平に沿って人工の光で白んでいるだけに、余計に黒さが際立っている。

ふいに冴珠の足が緩みその動きを止めた。一真はその隙に距離を縮める。塗装の剥げかけた板が冴珠の佇む細い道の口に立てられてい

るが、一真の所からは何と書かれているのか見えない。

冴珠は、その細い道へと折れた。

「どこだよ、ここ」

流石に荒れる息を宥めながら看板と辺りを見回し、一真はうる覚えの周辺地理と自分の通った道とを照合させる。滅多に来ない街外れだがここまでほぼ最短距離でやって来たらしいと推測できた。

(…ここって)

一真は腕で額の汗を拭う。

今しがた冴珠が折れたその細い道は、先刻からずっと見えていた黒塊に突き当たり、行き止まりになっているように見えた。街灯は減ったが道に覆い被さる木々は無い。数少ない街灯と自然光に頼ったモノクロの視界だが、十分見える。

冴珠はゆつくりと小山に続く道を歩いていく。後を追う一真の存在にはまるで気付いていないようだ。道は途中から白っぽい石畳に覆われていて、その先の山の麓に色の剥げた小さな鳥居が立っているのが一真の目に付いた。

(神社：でもここ、本当は古墳じゃなかったっけ…)

古墳と神社が一緒に有るのはそう珍しくはなかった筈だ。確か地域学習でこの山の上には小さいが古い古墳ある　と紹介されていたと思う。

さっき見た看板の字は殆ど消えて読めなかったが、見た事がある気がしたのはその所為かもしれないと一真は足早に距離を詰めながら考えた。

冴珠が鳥居へと続く石畳で立ち止まった。一真と冴珠との距離は五十メートルもない。駆け寄ろうとした一真は、寂れた小さな赤い鳥居の前、身動きもせず立ち尽くす背に一瞬、拒絶を恐れた。

あの不思議な壁が　世界を隔てていた。

今冴珠はひとり、誰もいない世界にいる。見覚えのある密やかな光景が、確かに存在した『止めなければ』という想いを嘘のように鎮めてしまっている。

牙珠は：本当に一真が思うように、ここから去ることを望んでいないのか？

（本当は）

ザアっと一真の後ろから風が吹き抜けた。しんとしていた辺りの木立が揺れる。葉と葉が擦れ、鈴の音のように鳴った。水分を含んだ重い風は可視の波に姿を変え、麓から頂までの木々の枝を震わせうねりながら這い登る。小さな椀を伏せたような山全体が、春の夜風に落ち着き無くざわめいている。

誘われるように、一步。

一真は自分がどうしたいのかを決め兼ねたまま、動き出した牙珠を視線で追った。そして気付く。彼らの足元の石畳は山頂に向かって伸びる細い階段に続いていた。薄闇の中曲線を描く参道は中腹で暗い木蔭に消え、山の頂の少し手前で再び姿を現している。

一真は牙珠につられて足を動かした。

これでは彼に追い付けないと理解していても、自分の正当性を主張仕切ることが今更になって出来なかった。

（本当は　ずっと）

一真は足元から頂上まで道を目でなぞり、はっと息を呑む。月が、あった。

山のすぐ上に浮かんだ不気味に輝く月。滲んだ月は何色とも形容しがたく、黄味を帯びた薄い光を空へ振りまいている。山が一層黒々として見えた。山を這うあの階段はまるで　月への道だ。

今宵は　満月。

ざわつとした胸騒ぎが強く甦る。

（ふざけたこと考えんな！）

一真が山のすぐ麓に立っている所為だ。偶然だ。月がこの小さな山のすぐ上に見えるのは距離と角度と方角の問題だ。

言い聞かせるそばから良く知った昔話のフレーズが溢れ出す。

十五夜の夜

月から迎えが

頭の中が変になる。耳の奥で心臓がドクドクと警鐘を鳴らしている。一真が視線を奪われているその間にも、また一步冴珠は月に近付いていく。気付いた時には冴珠の姿は鳥居の真下にあった。

（そっちに行くな！！）

勝手に体が動いた。理屈も理由もかなぐり捨て一真は必死で走っていた。

冴珠を行かせてはならない。山の上へ、あの月へと続くぼんやりと光る石段を昇ってしまったら、もうきつと戻って来ない！一真の鼓動がそう喚いている。

「冴珠！！」

見慣れた後姿。振り向かないのは聞こえないからか、ここには戻らないという意味の表れか。

（どうでもいいんだよ、そんなことは！）

昂然と頭を上げた冴珠の脚がゆっくりと、切り立った石段に掛けられる。流れるような動作に目眩がしそうだ。

あと数メートル。

（おまえ自身の意思だったとしても構うもんか！行くな！！）

「冴珠　　！」

幼馴染に向かって伸ばした腕。一真の指先が掠めるように冴珠の肩に引っ掛かったと感じた瞬間。

「ッ！！てめ…！！」

届いたと思った腕は凄まじい勢いで払われた。だが弾かれた痛みは、思わず睨み付けた先の冴珠によって忘れさせられた。冴珠は身を捻り片足を段に掛けたまま、無言で一真を見下ろしている。すぐ後ろに覆い被さる樹木の深い闇。それを背負った冴珠の瞳には何の感情も浮かんでいない。

「おまえ、一体どうしちゃったんだよ！何やってんだよ！！」

風に共鳴するざわめく森が冷気を震わせ一真の声を飲み込んだ。応

えは無い。そのままふいと冴珠は身体を反転させる。

「待て！」

放すまいと一真はその腕を懸命に掴んだ。不揃いに切り取られた石を積んで造られた階段は狭く、一段一段が高い。その階段で二人は揉み合いになった。足場と視界が悪過ぎるのに加え、どうしても一真の理性が手加減をしてしまう。だが冴珠には迷いは無かった。体勢を崩しかけた一真に冴珠はすかさず上段から横面を狙って腕を薙ぎ払う。咄嗟に身体を捻り腕で目をガードしようとしたその瞬間、一真の血の気がざつと引いた。退いた足が空を踏む。ガクンツと後傾する身体。

致命的なミスをしたと本能が叫ぶ。

落ちる！！

完全に身体のバランスを崩した一真は、石段から落下するのを反射的に覚悟した。

虚ろな光を浮かべる冴珠の両眼が、手を伸ばす一真の姿を映している。

（冴珠！）

その刹那 ドンツと一真の肩に物凄いプレッシャーを持つ何かが押し掛かった。一瞬目の前がカツとなつて一真の全ての感覚が吹き飛ぶ。

「！！！」

何か、が一真の体を動かしていた。

白く灼き切れそうな視界。左目に走る痛烈な熱。冴珠の眉間を射抜く右手の人差し指。

ゆらり。

異様な光を宿した冴珠の瞳がゆっくりと瞼の裏に沈みゆくのを、一真は他人事のように見ていた。力を失った冴珠の体が前のめりになり一真の方へ倒れ込む。二人はそのまま纏れ落ち、冷たい石の道に寝転ぶ羽目になった。

月は全てを見ていた。

終章 2

ふたりはごつごつとした石畳の参道に倒れ込んでいた。

「……」

下敷きになっていたのは一真だ。取り敢えず肘を突いて身を起したが、別の生き物になったように身体がどうしようもなく重い。長い間水中にいて、急に陸に上がった時に似ていた。

身体の上の^{こたま}牙珠は青白い瞼を閉じて、ぴくりともしない。

一真の背中や腕は多少痛むが、酷い怪我をしていることは無さそう
だ。

腹の上から押し退け、石畳に転がした牙珠の様子は未だ判らないが、一見して特に外傷は無い。揉み合った場所がそれ程高くなかったおかげだろう。

だが階段を見上げると、その先はやはりぽっかりと空いた闇に飲み込まれている。

「……行かなきゃ……」

はつと一真がその声に気付く。

天を仰いで寝転んだまま、焦点の合わない瞳をした牙珠が　　呟く。

「……行かなきゃ」

ぎくりと背筋が震えたのは押し隠した。

「黙れ」

一真は牙珠の頬を軽くはたくと重い身体を叱咤し、ふらふらと立ち上る。獲物と多少揉み合いながら、神社のすぐ近くにあった公園までそれを引き摺って来た。

「てめえ、いい加減にしとけよ」

なお動こうとする牙珠に今度は容赦しない。

子供の忘れ物であろう小さなバケツで水道水を頭からぶっかけ、ベンチにどさつと座らせる。漸くおとなしくなったのを確認し、一真もその隣に腰を下ろした。

「…オレって結構面倒見いいよな」

一真はベンチの背凭れに伸びた。水銀灯の清冽な白光が公園を守っている。見上げた月も白い光に変わっていた。

少し離れた国道から車の走る音や、木々を揺らす風の音が時折聞こえる。決して静かではないが、落ち着いていてホッとする空間だった。

（さっきの怖い　赤い月が嘘みてえだな）

そう思いながら右隣の冴珠を見ると、ゆるゆると顔をあげた。瞳はどこか夢を見ているような弱い光を灯していたが、徐々に意思を持ち纏まり始める。

「あ…カズ？」

冴珠は一真をやっと認識したらしい。何でこんなところにお前がいるんだ？というような、不思議そうな声だ。

「大丈夫か？」

「……何言ってるの？」

いつもの調子だった。

お前、何やってんだと呆れるような、いつもの冴珠の声だった。

知らず強張っていた一真の肩の力がかくつと抜け、思わず目の辺りが滲みそうになる。一真はそれを隠そうと声を荒げた。

「最初の言葉がソレかよ。信じらんねえヤツだな！」

今一現実に戻り切れていないのか、冴珠は辺りを見回し、首を傾げた。

「信じられないって……ここどこだよ」

「街外れの公園」

「何で？」

「おまえを追っかけて来たせいだろ」

「は？別に来なくても良いだろ。っていうか…何で俺こんな所にいるんだ？」

「知るかよ馬鹿野郎！」

「大声出すな」

ウルサイ、と顔を顰める冴珠に流石の一真も堪忍袋の緒が切れた。

「オレが知るかよ！おまえがおかしくなっちゃったからだろ！！」

冴珠は正面から肩を強く掴まれ、呆氣に取られた。

「何とか言え……」

一真の指が肩に食い込んで 痛い。だが一真にぶつけられた怒りに対する戸惑いの方が大きく、冴珠は振り払うのを躊躇った。生じた痛みはやがてそこからじわじわとした熱になり、身に沁み込んでゆく。

安心感とでもいうのだろうか。

他者と繋がる熱にふつと穏やかな気持ちになって冴珠は力を抜いた。

「月が……鳴ってるんだ」

冴珠の唇から零れたのは謝罪ではなく、そんな言葉だった。

一真が怪訝そうにするのを見て苦笑いが漏れる。冴珠は仰のき、高天の月を見遣った。

「最近…四月の頭くらいからかな。最初は耳鳴りだと思ってた。鈴みたいに…夢の中でも起きてる時でも…唐突に鳴り出すんだ。錯覚かもしれないけど 俺にはそうは聞こえなくて。今日もお前の電話の後、偶々窓の外を見たら大きな赤い月が出ててさ。そしたら

鈴の音が大きくなった」

「その月なら俺も見た」

「そうか……」

「すげえ怖かった」

「怖い、か。俺は 音がどこから響いてるのか知りたくて仕様が無かった」

「月から、なんだろう」

「今日知った。今まで解らなかったんだ。気付いたら外に出て、音を追っかけてた。おかしいだろう？たかが鈴の音なのに…追いかけたんだ。必死で」

一真は月を背にして冴珠に影を落としたまま、黙って耳を傾けている。

「ただ、それだけだ」

目を伏せた冴珠は右肩を掴むその手に触れた。

食い込む指先から伝わる熱。

日常世界の流れに戻ったのだ。互いの体温が今ここに確かに存在していることの証明だ。

「もう、大丈夫だ」

溜息と共に一真はゆつくりと指を解き、どさりとベンチに腰掛けた。冴珠は静かに月を見上げる。

「あの音は…凄く身近で、俺に馴染んでる音だと思ったんだ。懐かしいって」

昔聴いたオルゴールの螺子を久々に回し、メロディーが流れ出した時ような。胸がほっと温かくなる音色。誘われる様に後を追った。それは次第に大きくなり、ただの鈴の音が、自分を呼ぶ声か、それとも全ては錯覚で、何も無いのかすらわからなくなった。

「気付いたら月を見てた。月から聞こえてくるんだって、やっとわかった。月が俺を呼んでたんだ」

限りなく降り注がれる鈴の音は月への道標。

「それでああ…月が呼んでる音なのかって思ったら」

「思ったら？」

一真が顔を正面に向けたまま、ちらつと冴珠に視線を向けた。冴珠は静かに息を吐いた。

「馬鹿みたいに安心した」

だから冴珠は足を踏み出した。あの音の先に己が欲して止まないものが存在している気がして。

（満たされていた）

あの鈴の音のする月に、冴珠は確かに満たされていた。

「動物みたいだけど、帰巢本能って言うのかな。行くのが当然で、疑う余地なんか存在しなくて、ああこっちだ。自分の場所だって」訪れた沈黙の中、天を見上げたままの冴珠の眦からぽつりと滴が伝う。

「どうしても行きたかった。具体的な場所なんてわからないけど。それでも　あそこにかえりたかった」

あの音の響く処に還りたいという渴望。千鳥と出会った後、込み上げた衝動の正体はそれだった。

帰リたかったのだ。どこか、自分を呼んでくれる人の元へ。

それを見つけている彼らが途轍もなく羨ましかったのだ。

唯一人で良い、心の真中まで呼んで欲しいと願っている自分。

牙珠の欲するものを、それが無いが為の恐怖や孤独の気配を知りもしない子供達が、当たり前のもものとして簡単に享受していた。

あの抑えがたい激情は　嫉妬だ。

「後悔してんのか」

牙珠はそつと瞼を下ろし、唇が笑みを刻んだ。

「今日の事は…『ポンピンプー』だよ」

「…意味無いなんておかしいだろ。おまえにとっては、意味無えもんじゃねえだろ」

「お前がそんなんだから」

牙珠は苦笑する。美鈴との一件があつた頃の事だ。自分を誤魔化せなくなつた牙珠は神経を尖らせ、その名前おと前に身構えるようになった。呼ばれる度に、おまえはそこにいないんだと宣告されている気がした。名前の違和感は牙珠の存在も居場所も否定していた。

それでも牙珠が絶望し切らなかつたのは、彼を取り囲む家族や友人という近しい人々が、牙珠の名を真つ直ぐに呼び続けたからだ。心が受け取れない名であっても、他意は存在しなかった。在つたのは殆ど無条件の親愛の情だ。

ただそれだけが救いだつた。

それ故の葛藤や苦痛もあつたが、彼らは満たされない『牙珠』を丸ごと受け入れて、呼んでいた。だからこそ牙珠は、己の存在を否定しようとする自身やあの魔物を押さえ込んでこれたのだ。

「何だよ」

「さあ何だろうな」

「はぐらかすな。今も行きたいと思ってるのか」

「……いや。きつと怖いんだ、あの先に行くのが。鈴が聞こえると……自分が何か別のものになりそうな変な感じがしてたんだ。でもあの音を聞いたなら」

冴珠はゆるく首を振った。

「行かなきゃならないと思ってたんだ」

一真は目を細め爪先で幾度か固い土を詰った後、漸く口を開いた。

「それは　今じゃねえと駄目なのかよ」

「今？」

「まだ時間はあんじゃねーの。そんなに急いで行かなきゃならないのか？」

「　わからない」

「なら、もう少しゆっくりしてけよ。おまえが満たされんのに何が必要なのかわかんねーし、居心地は良くないかもしんねえけど、ここもおまえの居場所だろ。　違うか？」

冴珠は目を見張り、隣の一真をまじまじと凝視した。

「うわ……クサイ科白」

「おまえな……」

一真の首がぐくとベンチの背凭れの向こうに落ちた。器用だな、と冴珠は呟く。

「でも有難く戴いておくよ。　楽になった」

「素直じゃねえの」

「当然知ってるだろ」

「存じてますとも！　　おまえ、最近凄く焦ってたぞ」

「そんなに、か？」

何かに急かされるよう感じていたのは事実だが、それ程酷かったかと冴珠は訝る。

「らしくなくな！島田さんも気にしてたぞ」

冴珠がちよつと顔を顰めた。失態だと思っているに違いないと一真は想像する。

（らしくねえ、か）

自分は冴珠の何を知り、何を理解しているというのか。所詮は全て想像に過ぎない。だが一真は言わずにはいられなかった。

「もう暫くこつちに居ろよ」

時が来れば、きっと何かが起こるのだろう。何が訪れ、何が変わり、自分達の関係がどうなるのか知る手も無い。だが彼は『ここに居る』という選択肢を選んだ。行かなかった。

「まだその時じゃないんだろ。おまえは決めたら変えねえの、オレは知ってる。そのおまえが今ここにいるんだ」

この友人を失いたくない。ただそれが伝わって欲しいと思う。

「……」

白く滲んだ月を無理な体勢で見上げたままの一真。冴珠も天を見上げた。

天上の月は満ちても、ここは何かが欠落している。

どこで満たされるか、線を引くのは己であり、冴珠は未だその線を引けない。だが満たされないこの世界は 自分が存在する確かな場だった。

「ここも俺の居場所なんだ。だから」

言い聞かせるような言葉は、果たして誰に向けられたのか。

「ここに、いる」

冴珠はゆっくりと立ち上がった。一真は仰け反らせていた頭を起こす。普段とは逆の位置で二人の目が合う。顔を見合わせ、どちらからともなく嘖き出した。

「帰ろう」

「…… 全く、迎えに来た相手に向かって何言ってるんだか」

「行くなって言いたくせに」

「おまえがあんまりにも変だったからだ」

「知るか、そんなの。ところで… 何で服が濡れてる訳？ 寒い」

「おまえが悪い。水掛けるまで正気じゃなかったぞ」

「まだ寒いのに、もう少し方法があるだろ。後先考えずに動くのは昔っから変わってない」

「正気付けてやったんだぞ！兎に角家に帰ったら真っ先に風呂に入れ」

「わかつてる。俺だつて態々風邪引きたくないし…ああ寒い。それにあちこち痛い？」

「気のせいだ」

一真に向けた冴珠の目がすうつと細められる。

「お前……さては殴ったな？」

「お相子だろうが！！」

やりやがったなと冴珠が拳を固めるのを見て、一真は腕をバツと捲くりあげた。

「見ろ！」

まだアザは出来ていないが所々赤い筈だ。明日辺りきつとヤバイ。勿論冴珠と遣り合ったり石段から落ちた時に出来たものだ。

「暗くて見えない」

「ざけんな　！！おまえ本気だったぞ！」

いつもの会話。いつもの二人。お互い少し饒舌なのは月光の所為だ。他愛ない会話の途中、冴珠は白い月をちらつと振り返った。

（まだ時間はある、か）

考えもしなかった。もう今しかないと思っていたのに。

今夜の事を上手く説明できなくとも、何かが訪れる予感はある。それが姿を現すのは時間の問題だと冴珠は思った。確かに、月は彼を呼んでいたのだ。ここに還って来い、と。月へと続く道は、今度いつその扉を開くだろう。その時自分はどうするのだろう。再び閉じるか、踏み出すか。ひとつ確かな事は、時が満ちれば自ずと踏み出す事を選ぶだろうということだった。他の誰かの為で無く、自分自身を満たされるために。

だが満たされることに不安が無いわけではない。

冴珠はあの幼い春に、終わり無き自問自答の世界を選んでしまった。自身の記憶のある範囲では、『葛冴珠』は足りないものを求め続けている。満たされてしまえば…もう、それは自分ではあり得ず、全く別のものになってしまふのだろうか。

（解らない）

満たされたその結果がどうなるのか、その時にならなければ誰もわからない。

その選択の時までは。

（ここにしよう）

己に与えられた、このどこかあやふやな世界に。

「何やってんだ？早く帰らないとおばさんに心配されるぞ」

一真は立ち止まってしまった冴珠を振り返る。普通に歩けば半間程掛かる距離だ。我ながら良く追いかけたと一真はしみじみ感心した。

「平気だろ、この時間なら」

「……言い忘れてたけど、明日の放課後、矢野さんの歓迎会やるぞ」

「…ふうん」

「来んだろ」

「行くよ」

冴珠はさらっと頷いた。その自然な動作に、一真は言いそびれていた自分が可笑しくなった。

「星…あんまり見えないな」

「男と見て何が楽しいんだ？やっぱ美人のお姉さんと、こう腕を組んで」

「茂みに連れ込んで狼になる、と。それでお前は立派な犯罪者だ。オメデトウ」

「何でムードを楽しむって発想になんねえの。ロマンチックにだなあ」

「ロマンチック？似合わない。全くお前には似合わない」

「失礼もそこまでいくと返す言葉も失せるよ……」

「静かになって良いじゃないか」

笑いながら冴珠は一真の隣に並んだ。足音が二つ響く。

「……いいんだな」

前を向いたまま一真が確認の言葉を吐く。

「いいんだよ。帰るんだ」

月光に照らされた冴珠は驚くほど穏やかな表情をしていた。

歩いている内に辺りの景色は徐々に慣れたものに変わる。二人の前に冴珠の家の屋根が見えてくると、足が自然と速くなった。

「……早く風呂入れよ」

「……明日俺が休んだら間違いなく誰かさんのせいだから」

「つたく、誰のせいだってんだ」

「カズ」

「ああ!？」

「……一真」

喧嘩腰になりかけた一真は、冴珠の声音に動きを止めた。

「……なんだ？」

少し俯いた冴珠は、いつもより小さく見える。

「お前には感謝してる」

思わずぽかんと口を開けた一真に、冴珠は照れたような笑みを唇の端に隠して言葉を続けた。

「今日は本当に　ありがとう。良くわかんないけど……お前が止めてなきゃ今頃俺はもうここにいなかった。これから先にまた同じ様なことが起こるかもしれないけど」

近い未来、現実になると確信しているくせにと冴珠は自分の言い回しを心の中で嘲った。

あの懐かしい鈴の音に誘われて。誘われて　どうなるのだろう。どうなってしまうのだろう。冴珠にもわからない。

「どうするのか、その時にならないとわからないけど　お前にだけは言うよ」

今の自分が居る場所を示してくれたこの友人には。

「あ……ああ」

「ここも俺の居てもいい所なんだろう？」

「ああ」

最初掠れていた相槌が、今度はしっかりと返された。冴珠はもう一度月を見上げる。優しい白。包み込む光。耳を澄ますが鈴の音はもう聴こえなかった。柔らかな夜の気配だけが辺りを支配する。

「オレも、おまえの家族もきつとそう思ってたぞ」

一真は冴珠の家を指さす。門扉と玄関の外灯は明々と灯をともし、未だ帰らぬ家族を待ち受けている。

冴珠は小さく笑った。

「ありがとう」

一瞬、一真の脳裏に、一枚のビジョンがよぎる。

いつか、こうして冴珠は去って行く。

一真は絶ち切るように言葉を押し出した。

「じゃあな。また明日」

「俺が風邪ひいてなければね」

「そんなデリケートな人種かよ」

「お互い様だろ」

ニツと笑って一真は冴珠に背を向けた。少し冷たい風が一真の額を撫で、髪を緩く乱した。

冴珠はいつか、彼の月に還る。

今日のことは何なんだとか……そんなことは一真にとって重要ではなかった。あの冴珠が、親友が選ぶであろう場所。求めているもの。きつとここは一時の通過点に過ぎない。

それでも、いつまでもこのままだと願うのは愚かなことなのだろうか。

春の風はそれぞれの想いを抱いて、どこまでも駆けてゆく。
祈りの季節は夜に沈んでいった。

FIN

終章 2（後書き）

あなたは、あなたの名前を呼ばれていますか。

初めて書いた長編なのでお見苦しい所も沢山あったかと思われますが、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

ここまでお付き合い下さって、どうもありがとうございます m)

——) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1013f/>

Missing Link

2010年10月9日20時01分発行